トドキ遺跡Ⅲ

筑紫野市文化財調査報告書　第84集

2005

筑紫野市教育委員会

トドキ遺跡Ⅲ

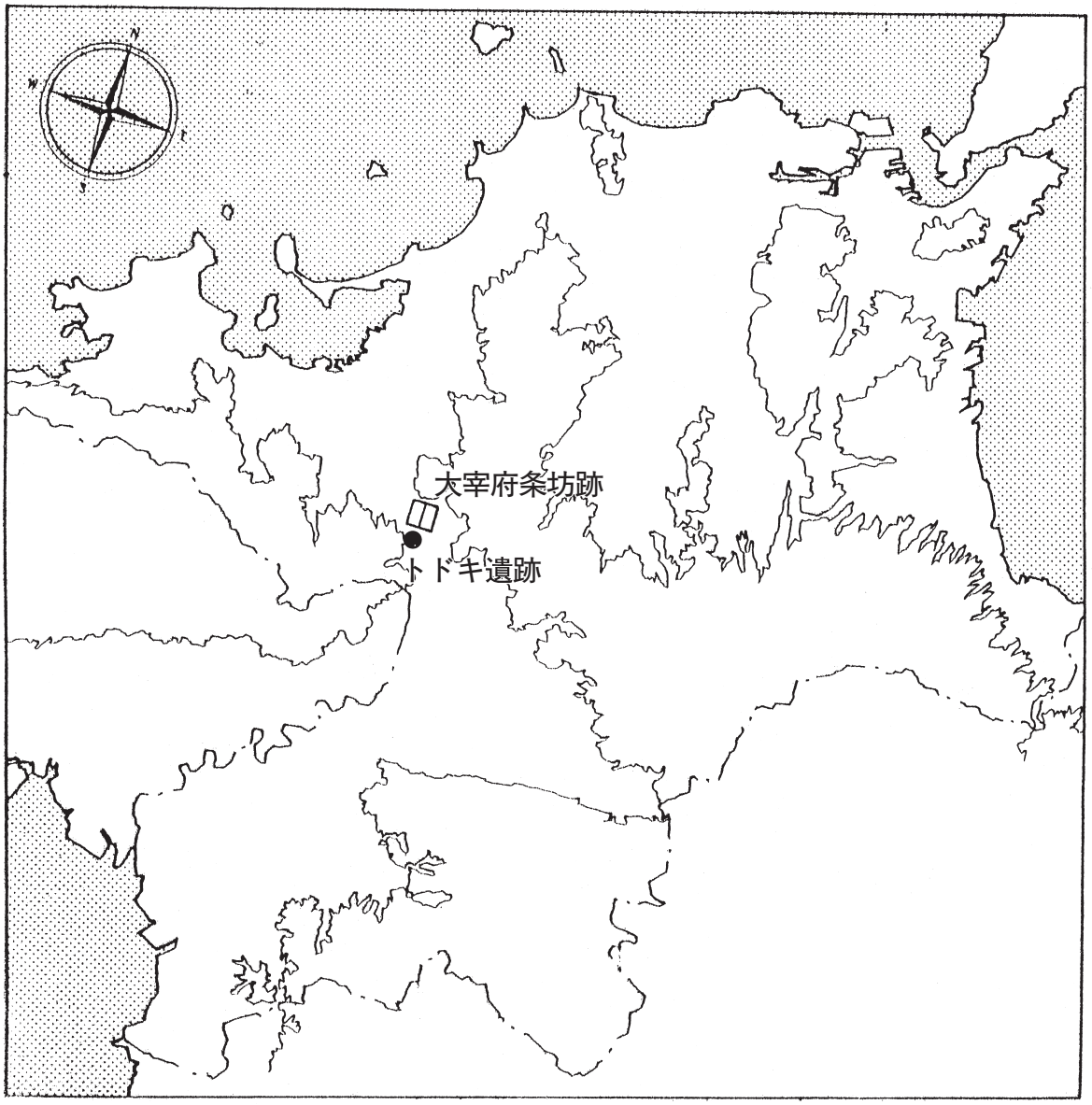
筑紫野市文化財調査報告書

第84集

2005

筑紫野市教育委員会

トドキ遺跡Ⅲ



例　　言

1．本書は筑紫農協山口支店建設に伴い筑紫野市教育委員会が発掘調査を実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．調査は、筑紫農業協同組合本店の委託を受けて平成13年度に筑紫野市教育委員会が実施した。

3．調査対象地は、筑紫野市大字古賀408番地の３である。

4．平成４年度に水資源開発事業に伴う発掘調査と平成８年度にはインターチェンジ取付け道路建設に伴う発掘調査が同一遺跡内で実施されているため、本報告は「トドキ遺跡Ⅲ」とした。

5．試掘調査から契約に至るまでの業務は、小鹿野亮（当時文化課文化財担当技師）が行った。

6．発掘調査は、渡邊和子（当時文化課文化財担当技師）が行った。

7．現地での遺物取り上げにあたっては、完結する単体の遺構には頭にＳを冠し、掘立柱建物跡として纏まらない単体のPitにはPを冠した。報告書作成にあたり、遺構の性格付けを行い、竪穴住居跡をSI、墳墓をST、土坑をSK、溝状遺構をSD、性格不明遺構をSXの略号とし、番号については、遺物取り上げの番号をそのまま付した。

8．調査に係る一部の遺構実測は渡邊和子が行い、全体の遺構については東亜建設株式会社（現場代理人：辻久弘）に写真測量を委託した。

9．遺構写真は、渡邊が撮影し、空中写真は㈲空中写真企画に、遺物写真についてはフォトハウスOKAに委託し撮影した。

10．遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。

11．本書で示す土層や遺物の色については、農林水産省農林水産技術会・㈶日本色彩研究所監修「新版　標準土色帳」を基準とした。

12．挿図中に使用した方位は、すべて日本測地系の座標北を指し、磁北を示す場合は、挿図中にG.Nを記している。

13．報告書作成に係る製図は一部を渡邊が、他は㈲文化財テクノアシストに委託した。

14．本書は、渡邊が執筆、編集した。

目　　次

頁

1．調査に至る経過 …… 4
2．位置と環境 …… 4
3．調査の内容 …… 5
上面の遺構
① SI（竪穴住居跡） …… 5～7
② SK（土坑） …… 11～12
③ ST（墳墓） …… 12～16
④ SD（溝状遺構） …… 17～18
⑤ Pit（柱穴） …… 18

頁

下面の遺構
① SI（竪穴住居跡） …… 20
② SK（土坑） …… 25～29
③ ST（墳墓） …… 29～30
④ SP（貯蔵穴） …… 30～31
⑤ Pit（柱穴） …… 31～32
⑥ SX（性格不明遺構） …… 32
⑦ その他の出土遺物 …… 32～33
⑧ 縄文時代の調査について …… 33
4．小結 …… 33

Fig.（挿図）

Fig. 1　周辺遺跡分布図（S1/25,000）…… 1
Fig. 2　周辺地形図（S1/2,500）…… 2
Fig. 3　上面遺構配置図（S1/200）… 折り込み
Fig. 4　SI-38・52・55・106 実測図（S1/60）…… 6
Fig. 5　SI-38出土遺物実測図（S1/2）…… 7
Fig. 6　SK-01・18・25・37・39・51・54・61・95・96・107・112・115・121・130・138実測図（S1/60）…… 8
Fig. 7　SK-85出土石鏃実測図（S2/3）…… 11
Fig. 8　SK-137・145実測図（S1/60）…… 11
Fig. 9　SK-01出土遺物実測図（S1/2）… 11
Fig. 10　ST-05・11・27・28・34・35・41・43・78実測図（S1/30）…… 13
Fig. 11　ST-47・103・110・117・118・122・131・136・139実測図（S1/30）… 15
Fig. 12　SD-02出土石器実測図（S2/3）…… 17
Fig. 13　Pit出土遺物実測図（S1/2）…… 17
Fig. 14　Pit出土石鏃実測図（S2/3）…… 18
Fig. 15　下面遺構配置図（S1/200）… 折り込み
Fig. 16　SI-73・75・184・186・200 実測図（S1/80）…… 21
Fig. 17　SI-67・185・202・203 実測図（S1/80）…… 22
Fig. 18　SK-65・74・154・181・182・189・199 実測図（S1/60）…… 25
Fig. 19　ST-173・174・193・206 実測図（S1/30）…… 29
Fig. 20　SP-179・180実測図（S1/30）…… 31
Fig. 21　Pit出土遺物実測図（S1/2）…… 32
Fig. 22　SX出土石鏃実測図（S2/3）…… 32
Fig. 23　SX出土石器実測図（S2/3・1/2）… 32
Fig. 24　その他の出土遺物実測図（S1/2）… 33

PL.（写真図版）

PL. 1　上面全景 …… 3
PL. 2　SI-38・106 …… 7
PL. 3　SK-18・25・37・39 …… 9
PL. 4　SK-96・130・137 …… 10
PL. 5　SK-01出土遺物 …… 11
PL. 6　ST-27・41・47・78・118 …… 14
PL. 7　ST-05・28・34・43・110・131 …… 16
PL. 8　Pit出土遺物 …… 18
PL. 9　下面全景 …… 19
PL. 10　SI-184・186・194 …… 23
PL. 11　SI-200・202 …… 24
PL. 12　SK-181・182・192 …… 26
PL. 13　ST-174 …… 30
PL. 14　SP-179・180 …… 31
PL. 15　その他の出土遺物 …… 33

表

表-1　SI一覧表 …… 24
表-2　SK一覧表 …… 27
表-3　SX一覧表 …… 30

1　大刀町遺跡

2　若八幡神社遺跡

3　立明寺地区遺跡

4　トドキ遺跡

5　貝元遺跡

6　立明寺古墳群

7　萩原遺跡

8　萩原木山遺跡

9　大牟田西遺跡

10　竹敷遺跡

11　永岡遺跡

12　大牟田東遺跡

13　常松遺跡

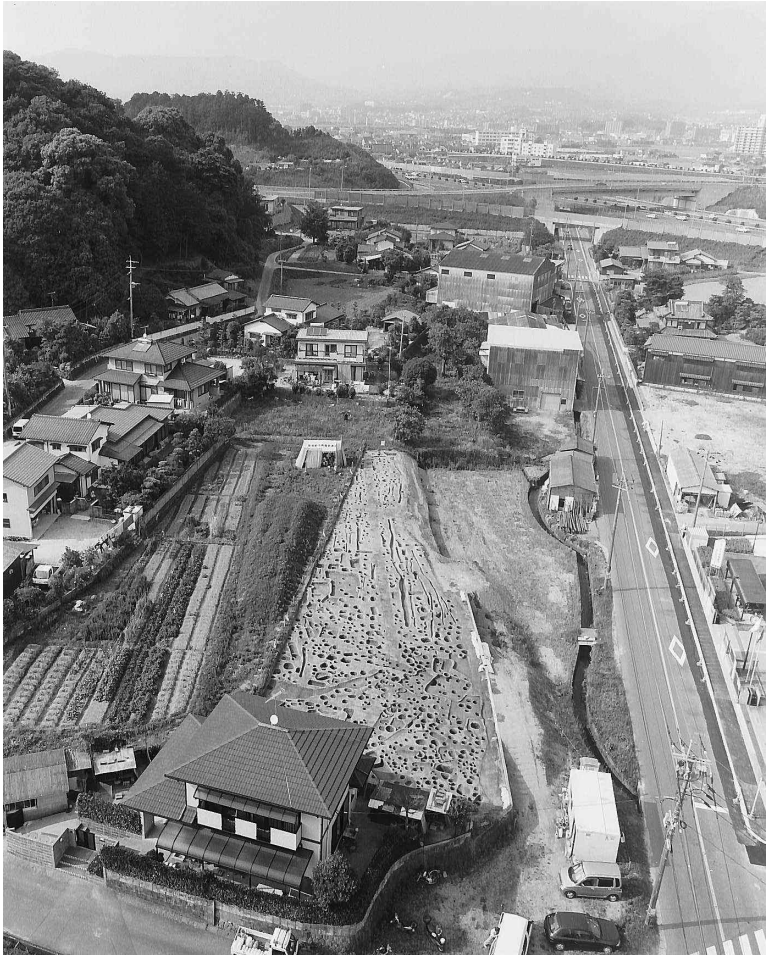
14　木山遺跡

15　久良々遺跡

16　筑紫倉良遺跡

Fig. 1　周辺遺跡分布図（S1/25,000）

Fig. 2　周辺地形図（S1/2,500）



南から

PL. 1　上面全景

１．調査に至る経過

筑紫野市が窓口となり、平成11年度に県道基山停車場平等寺・筑紫野線の拡幅工事の計画が策定された。計画のなかで道路拡幅路線内に所在する筑紫農業協同組合山口支店を移転することで、移転先の選定がされ、平成12年度に農業協同組合山口支店建設予定地が決定された。これを受けて市教育委員会では、埋蔵文化財の確認調査を実施した。確認調査では、予定地内2,800㎡のうち880㎡の範囲に遺跡が所在することを確認した。 試掘調査の結果を踏まえ、平成12年９月に市建設課と市教育委員会文化課（当時）の間で本調査への具体的協議に入った。文化課内部で検討した結果、本調査は平成13年４月から着手し、８月からの工事着手に間に合うように調査を完了するとの内容でまとまり、建設課と改めて協議し筑紫農業協同組合と契約を締結した。

市教育委員会では新年度４月10日より調査を開始した。しかしながら例年になく天候不順となり、発掘調査は進まなかった。しかも発掘調査中に調査区の一部にはもう一面の生活面が存在する事がわかり、部分的に二面の調査となった。現地における発掘調査は完了期限の平成13年７月31日まで行った。

御協力願った作業員の皆様方の労に、この場をかりてお詫びとお礼を心から申し上げる次第です。

なお、整理および報告書作成の作業は平成16年度に実施した。

２．位置と環境

筑紫野市は福岡市と久留米市を結ぶルートのほぼ中間に位置し、市域には国道３号線・JR鹿児島本線・九州縦貫自動車道・西鉄大牟田線といった南北九州を結ぶ幹線が縦断し交通の要衝としての役割を担っている。地形的には東から三郡山塊、西から脊振山塊の山々が迫り、その間に狭長な平野が形成され、平野の両岸には数多くの遺跡が存在する。その狭長な平野を形成する脊振山塊側の山麓部には山口川が流れ、この山口川は平野部に開口する手前で河岸段丘を形成しながら、基山山麓から派生する立明寺丘陵の西側を北東方向へ、さらに東方向へ走る。立明寺丘陵付近で再び河岸段丘を形成しながら永岡付近に至り、筑後川の支流である宝満川に合流する。

この平野部に開口する扇状地上には貝元遺跡が所在する。貝元遺跡は弥生時代から奈良時代までに営まれた集落跡で、インターチェンジ建設に伴う発掘調査により明らかになった。また扇状地の右岸には縄文時代遺物の散布地として知られる萩原遺跡が所在している。さらに立明寺丘陵上には、弥生時代の集落跡や立明寺古墳群が形成されていて、昭和45年「むさしヶ丘団地」建設の際に東京教育大学（現筑波大学）により発掘調査が行われている。

トドキ遺跡は、平野部に近い左岸の河岸段丘上の標高30～32mが遺跡の範囲として周知化され、今回までに民間の宅地造成に伴う発掘調査とンターチェンジ建設に伴う県道取り付け部分の発掘調査が２回実施されて、これらの調査をⅠ・Ⅱ次調査として埋蔵文化財調査報告書が刊行されている。

今回の調査区は筑紫野市大字古賀408-3番地に所在し、市の中心街より南に2.7㎞に位置する。Ⅰ・Ⅱ次調査の地点よりやや基山・脊振山寄りの250m程南にあって、トドキ遺跡のほぼ中央部に所在し、背後には大宰府の防衛上の施設として築かれた基肄城をのぞむ。

Ⅰ・Ⅱ次調査では、縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世の遺構・遺物が確認されている事から今回の調査でも、同様な時代の遺構が所在すると予想されていた。

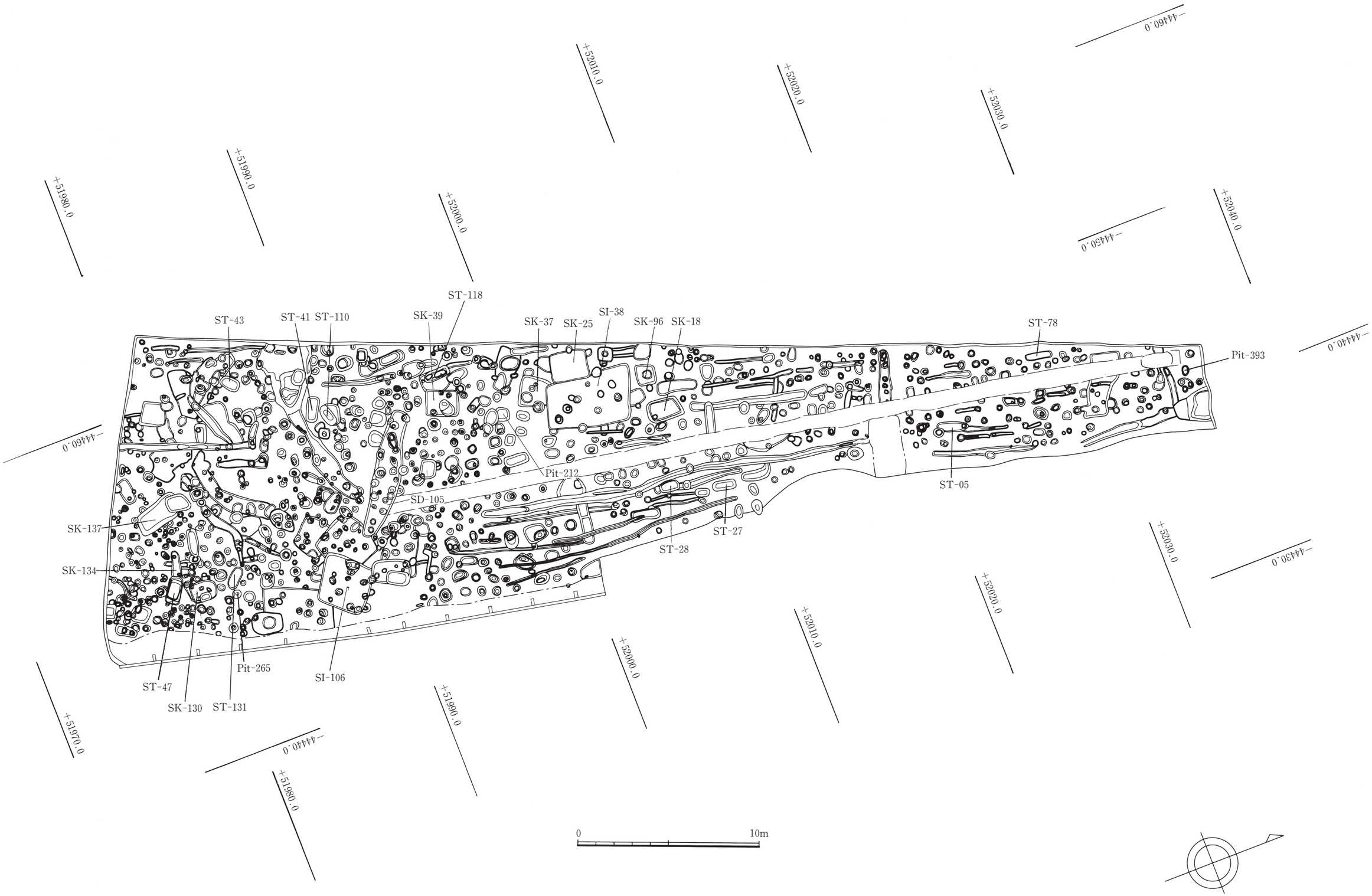


Fig. 3　上面遺構配置図（S1/200）

３．調査の内容

今回の調査区で検出された遺構は、SI（竪穴住居跡）・SK（土坑）・SD（溝状遺構）・ST（墳墓）・SX（性格不明遺構）・Pit（柱穴）である。しかし時期を明確にできるものは少ない。また遺構検出時に縄文土器の細片が出土した範囲があったため、下面の調査完了後にグリッドを設定し縄文の包含層として調査を行ったが、明確に捉えられなかった。

開発対象地はトドキ遺跡のほぼ中央部に位置し、標高54m前後を測り県道平等寺～筑紫野線の道路に沿って所在する。現況は畑や田の二段になって、下段の田は県道平等寺～筑紫野線の道路面より50cmほど下がっている。確認調査では表土（耕作土）直下に八女ロームがあり、遺構は全く存在していないため調査対象地より除いた。調査対象地内の上段の基本層序は、表土（耕作土）の下に床土が10～15cmの厚みであり、その下に花崗岩バイラン土に小砂礫の混じった明褐色砂質土が積み土としてある。この積み土の下が花崗岩バイラン土の地山となる。 積み土は調査区の南側では20cmほどで、北側に向かうほど厚みを増し40cm程度となる。北側方向の積み土が厚くなるのは、北側に小谷が存在する旧地形のためであり、これまでの調査においても小谷にあたる箇所や低い部分には厚い積み土が確認されていて、この積み土からと地山からの二面に遺構が検出されている。今回の調査区でも遺構は、この積み土と地山面からの二面検出できたため、積み土部分を上面として調査を実施した。上面で検出された遺構は、SI４軒、SK53基、SD67条、ST18基である。

上面の遺構

① SI（竪穴住居跡）

SI-38

調査区のほぼ中央部にあり、SK-37・97を切り、SK-25に切られる。主軸をN-13°-Eにとる。平面形は、不整長方形を呈す。短辺の北壁はやや蛇行するが、2.36m、南壁は直線的に3.1mを測る。長辺の東西壁は4.55～4.73mとほぼ同程度の長さとなる。壁の深さは26～34cmを測り、残りは良い。壁は垂直に近く立ち上がる。中央付近の床面には踏みしめや汚れが確認できた。また床面には８個のPitが検出されたが規則性はなく、どれも主柱穴としては考えがたい。遺物には須恵器・土師器・青磁の小片と黒曜石・サヌカイトの砕片が出土したが、図示できず時期は不明である。

SI-52

調査区の東南側で検出された。段のへりにあるため東壁側が失われ、SK-51・SI-106に切られる。北コーナー部分がSI-106に切られているが、ほぼ直線となる。平面は長方形または方形の形状を呈すと思われる。壁の深さは10cm程度で、緩やかに斜めに立ち上がる。床面は平坦で、中央部には汚れが確認できる。主柱穴間は1.1mを測る。東壁側が失われているが、主柱穴は４本の可能性が考えられる。出土遺物は須恵器・土師器・黒曜石の細片だけで時期は不明である。

SI-55

SI-106・SD-105に切られ、SK-61を切る。コーナー部分は南側しか残らないが、丸みを持ち、形状は不整隅丸方形を呈す。北側壁は外側やや弧を描くが、他の壁は直線的である。壁の深さは残りの良い所で20cmを測り、東側は台地の縁にあたるため８cm程度の深さしか残らない。壁は緩やかに立ち上る所と急な立ち上りの所がある。平坦な床面で、中央付近の踏みしめと汚れが顕著である。床面に検出されたPitの内、西側壁中央部分の壁から60cmで検出したものと東壁の中央部、壁から

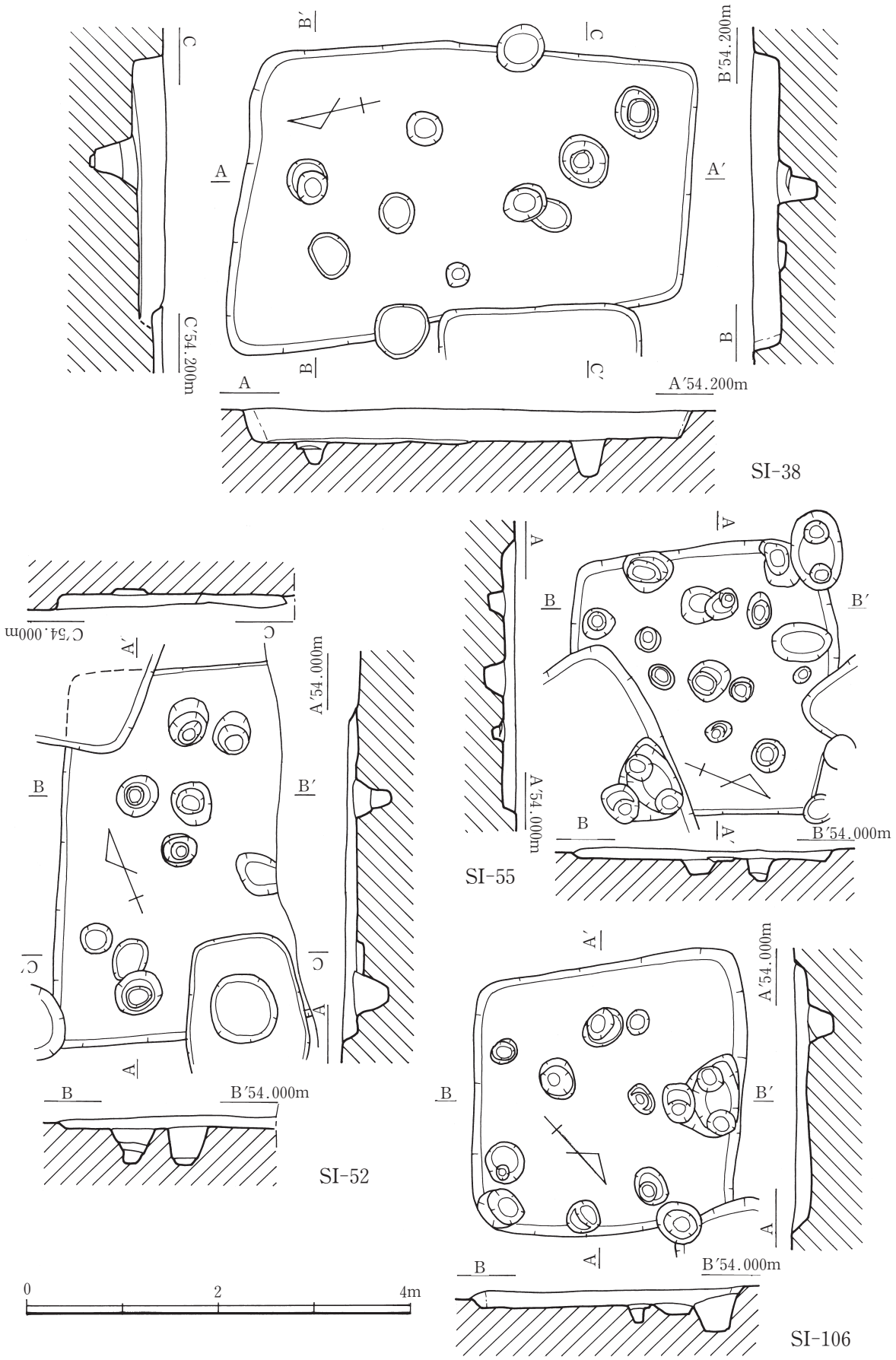


Fig. 4　SI-38・52・55・106実測図（S1/60）

80cmの位置で検出したもの二本を主柱穴とした。この二本の柱穴の埋土は暗褐色土である。遺物は須恵器・土師器・黒曜石の細片が出土したが、図示はできず時期は不明である。

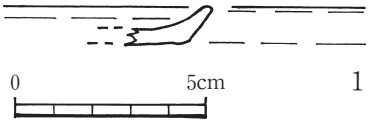


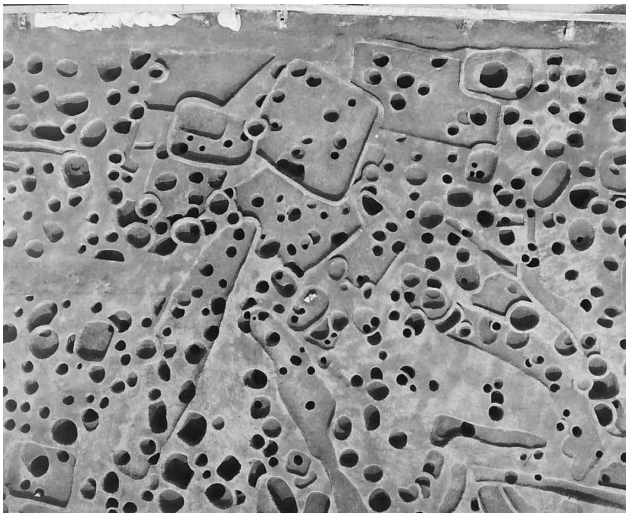
Fig. 5　SI-38出土遺物実測図（S 1/2）

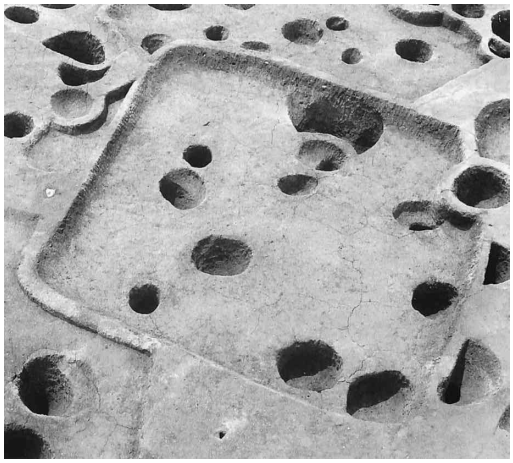
SI-106

SI-52の北側に位置する。SI-52・55を切り、SK-54に切られ主軸をN-42°-Eにとる。北西のコーナー部分がSK-54に切られるが、平面は不整隅丸方形の形状を呈す。壁は残りの良い部分で18cmを測るが、全体的には10cm程度しか残らない。壁は緩く斜めに立ち上がる。床面は平坦で、東側付近と中央部の踏みしめは顕著で汚れは全体的に観察できる。床面上に検出されたPitは全て不規則で、主柱穴とは考えがたい。遺物は全く出土せず、時期の確定はできない。

出土遺物

出土遺物は細片ばかりで図示できたのは、SI-38からの１点だけである。土師器の小皿aで、全体の1/8程度しか残存していない。器高は2.3cmを測る。内面は浅橙色7.5YR8/4で、外面は浅橙色7.5YR8/6の色調を呈す。残存する部分の内外面は、ナデによる調整を施す。胎土には1.5mmの雲母片と細砂粒を含んでいて、焼成は良好である。





SI-106

SI-38

PL. 2　SI-38・106

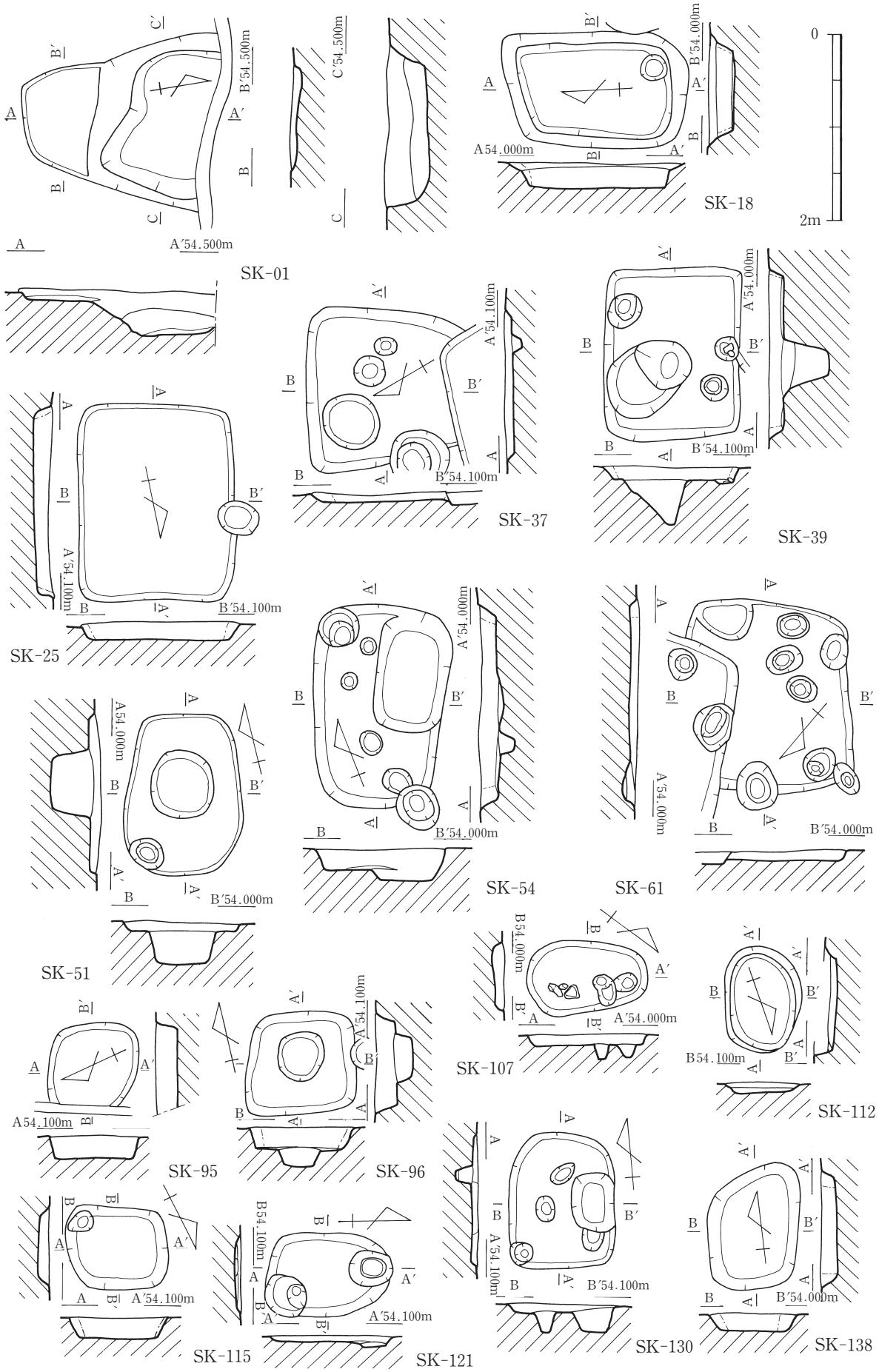
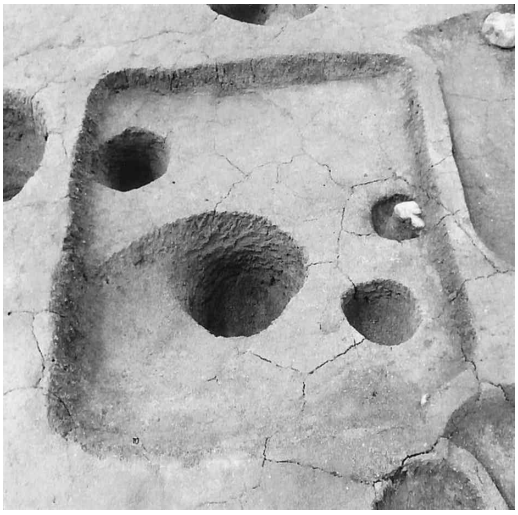


Fig. 6　SK-01・18・25・37・39・51・54・61・95・96・107・112・115・121・130・138実測図（S1/60）

SK-18



SK-39

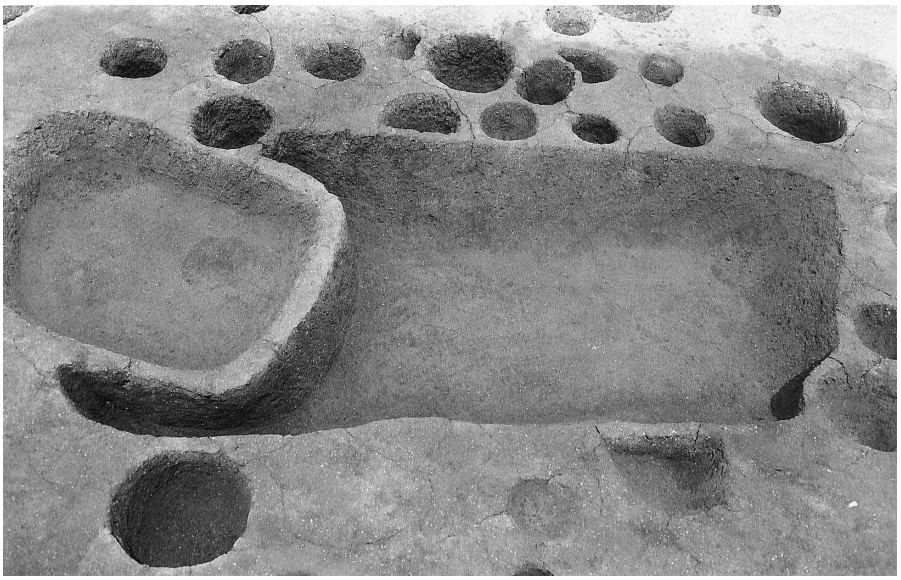
SK-25

SK-37

PL. 3 SK-18・25・37・39

SK-96

SK-130



SK-137

PL. 4 SK-96 • 130 • 137

② SK（土坑）

SK-25

SI-38を切る。主軸をN-11°-Eにとり、コーナー部分に丸みをもつ。平面は寸詰まりの隅丸長方形の形状を呈す。西側壁は緩やかに弧を描いてコーナーへ繋がり2.1mの長さとなる。 東側壁は直線で2.03mの長さを測る。壁は垂直気味に立ち上がる所と緩やかに斜めに立ち上がる所がある。床面は平坦で、Pit等もない。遺物は須恵器・土師器・白磁の細片が出土した。

SK-39

SD-105の北側で検出され、SK-116を切る。SK-25と同様に寸詰まりの隅丸長方形の形状を呈す。北西コーナー近くの床面にPitを持つ。ほかにもPitが検出されたがこの土坑に伴うものではない。

SK-51

調査区の東南側、段のへりにあり、SI-52を切る。主軸はN-15°-Eにとり、平面は不整隅丸長方形の形状を呈す。壁は10cmの深さで、緩やかに立ち上がる。床面は平坦で、中央付近に径70cmのPitを持つ。遺構の重複した可能性も考え精査したが土坑に伴うものであった。

SK-54

SI-106・SK-58を切って主軸をN-19°-Eにとる。平面は隅丸長方形の形状を呈し、東南部に隅丸長方形の落ち込みを伴って二段の構造になる。床面は上下ともに平坦。

SK-96

SI-38の北側で検出された。主軸をN-15°-Eにとり、中央付近に径約50cmのPitを伴い二段の構造を呈す。壁の立ち上がりは上下ともに垂直に近い。上下ともに深さ20cm前後を測り、調査区の中では残りが良い遺構と言える。

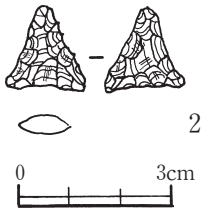


Fig. 7　SK-85出土石鏃実測図（S2/3）

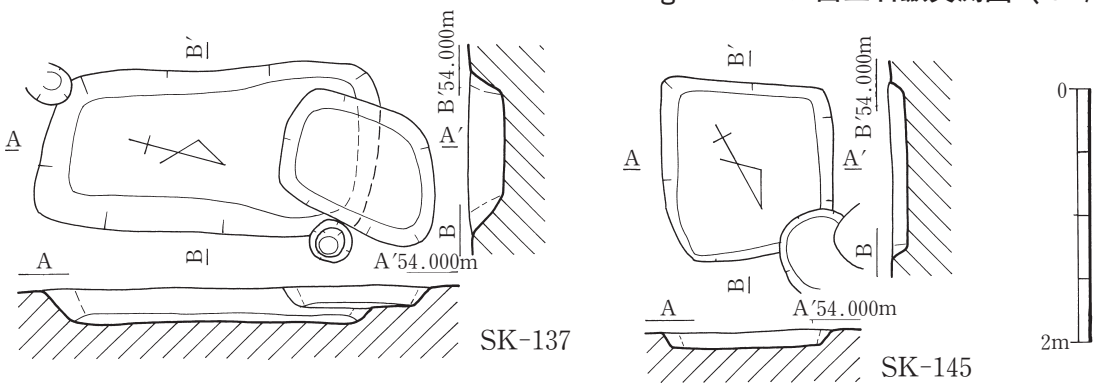
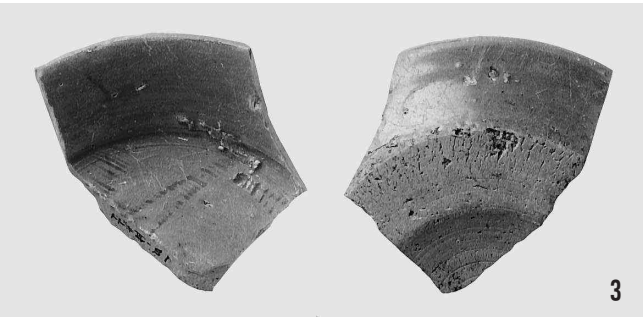


Fig. 8　SK-137・145実測図（S1/60）



PL. 5　SK-01出土遺物

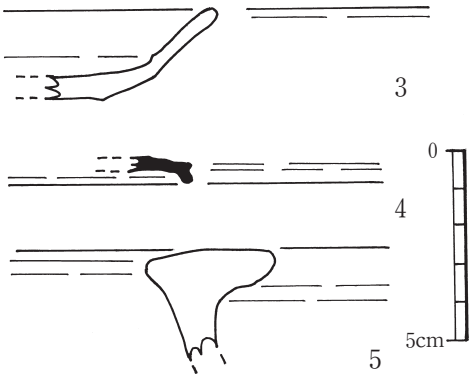


Fig. 9　SK-01出土遺物実測図（S1/2）

SK-115

SD-105の北で検出された。平面形状はやや寸詰まりの隅丸長方形を呈し、主軸をN-20°-Eにとる。床面は平坦で、壁は垂直に近く立ち上がる。南西コーナー部に径20cmのPitを伴っている。

SK-130

調査区の南側で検出。主軸をN-8°-Eにとる。平面は不整隅丸方形の形状を呈し、東側壁の中央に隅丸長方形のPitを伴う。床面は平坦で、壁は垂直に近く立ち上がる。

SK-137

調査区の南端で検出、SK-138に切られる。平面プランは不整な隅丸長方形の形状をなし、主軸をN-16°-Wにとる。北西側のコーナー部の丸みが強い。壁は深さ28cm前後を測り、緩やかに斜めに立ち上がる。床面は平坦でPit等の遺構は伴わない。

出土遺物

2 はSK-85から出土した黒曜石製の石鏃。長さ2.2cm、幅１cm、厚み0.4cmを測り、全面に調整がなく広義の剝片鏃である。**3** は青磁の皿で器高2.4cm、復元底径4.4cmを測る。内面が明オリーブ灰5GY7/1、外面は灰白7.5Y7/1の色調を呈す。胎土は緻密で焼成は良い。**4** は須恵器の坏蓋の破片で天井部の低い蓋と思われる。**5** は弥生中期中葉の甕の口縁部で、内外面ともに、にぶい橙色5YR7/4の色調を呈す。胎土には1.5mm以下の石英粒を含み、焼成は良好である。

③ ST（墳墓）

ST-05

調査区の北側にあってSD-06を切る。主軸はN-18°-Eにとり、不整隅丸長方形の形状を呈す。北側壁部にPitを検出した。床面は平坦で、壁も垂直に近い立ち上がりをなす。

ST-27

調査区のほぼ中央東側SD-29・33に近接する。平面は隅丸長方形を呈す。主軸はN-18°-Eにとり、長辺1.3m前後、幅0.5mを測る。床面は平坦で、壁は垂直近く立ち上り、深さ30cmとなる。

ST-34

SI-38の南東、確認調査のトレンチに近接し、主軸をN-2°-Eにとる。平面は隅丸長方形のプランを呈し、長辺1.3m前後で幅は0.6mを測る。床面には僅かな凹凸があり、壁は斜めに立ち上がる。

ST-43

調査区の南西側にあってSX-15を切る。主軸はN-48°-E、平面形状は寸詰まりの隅丸長方形を呈す。長辺1.1m、幅80cm前後を測り、壁は斜めに立ち上がって、深さ25cmとなる。床面は平坦で、土坑かとも考えたが、遺構の埋土は暗赤褐色7.5R3/2混じりの灰白色2.5Y8/2で、少量ではあるが炭・灰が混じっていた事から墳墓とした。

ST-47

調査区の南端、SK-130に近接し、SD-134を切る。主軸はN-51°-Wで、平面は隅丸長方形の形状をなし、二段構造の掘り方となる。平面から深さ10cm程度で、上段のプランが完結する。上段床面のほぼ中央に下段のプランが検出できる。下段のプランは寸詰まりの隅丸長方形を呈し、四方の壁面には熱を帯びた痕跡を残す。埋土には多量の炭や灰が混じり、この中で火が焚かれたものと思われる。四方側壁の地山への熱変化は厚さ10cm程度まで及んでいる。しかし床面は多少の熱を帯びているものの、側壁と同様なまでの熱変化は見られない。

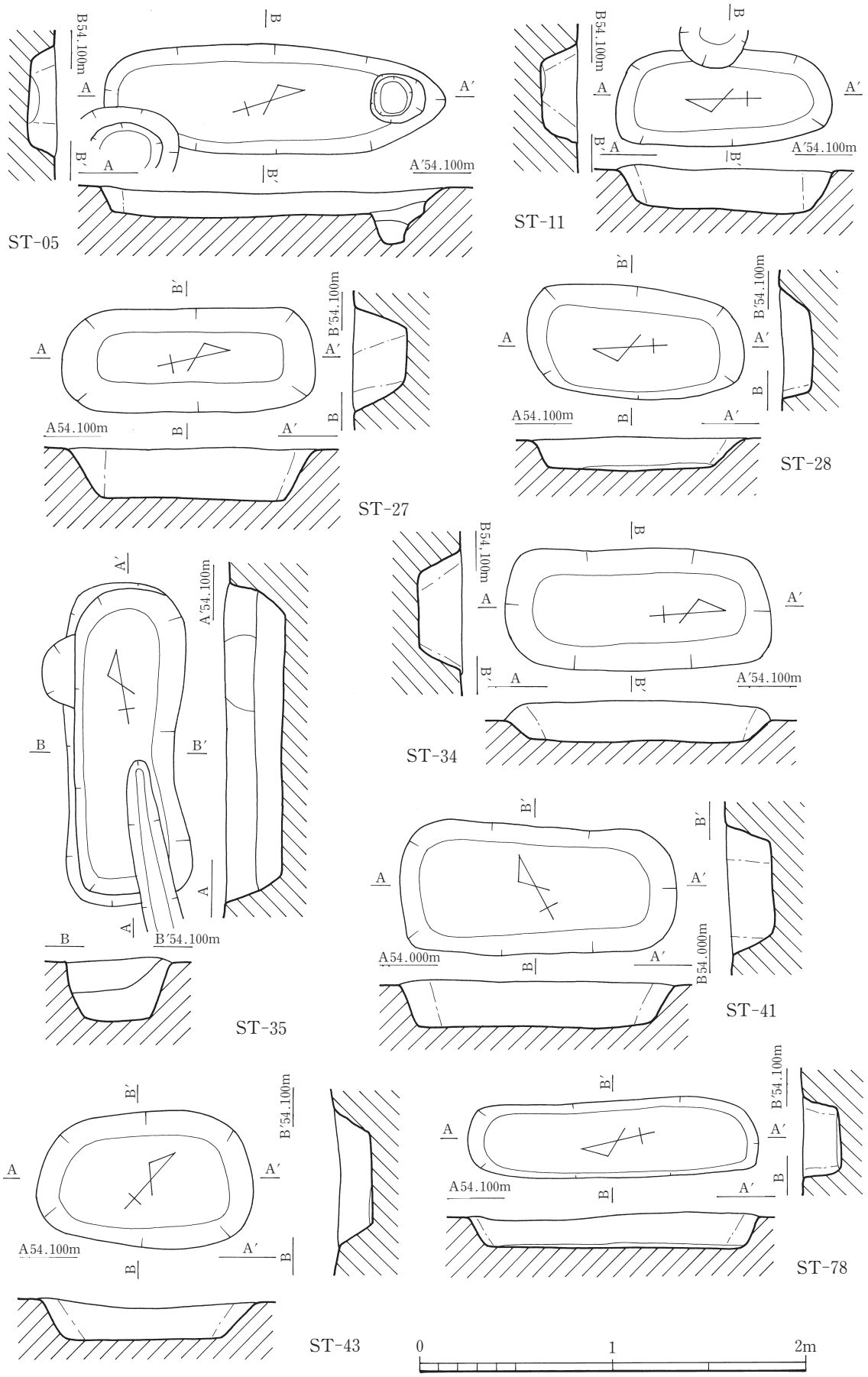
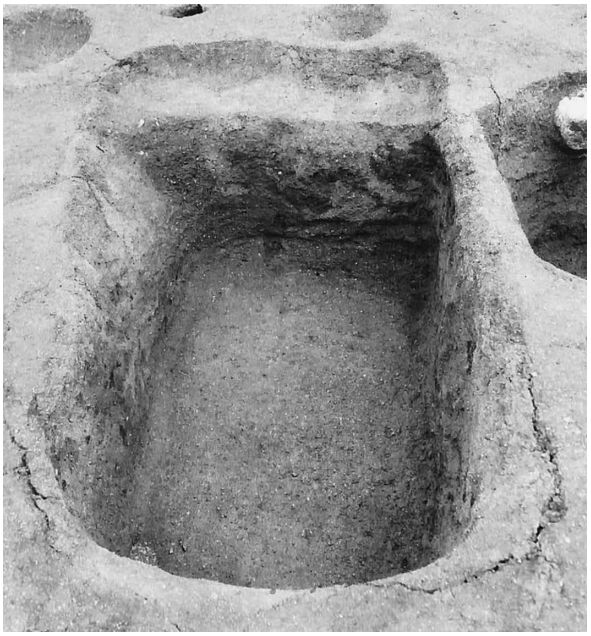


Fig. 10　ST-05・11・27・28・34・35・41・43・78実測図（S1/30）

ST-27

ST-41



ST-47

ST-118

ST-78

PL. 6　ST-27・41・47・78・118

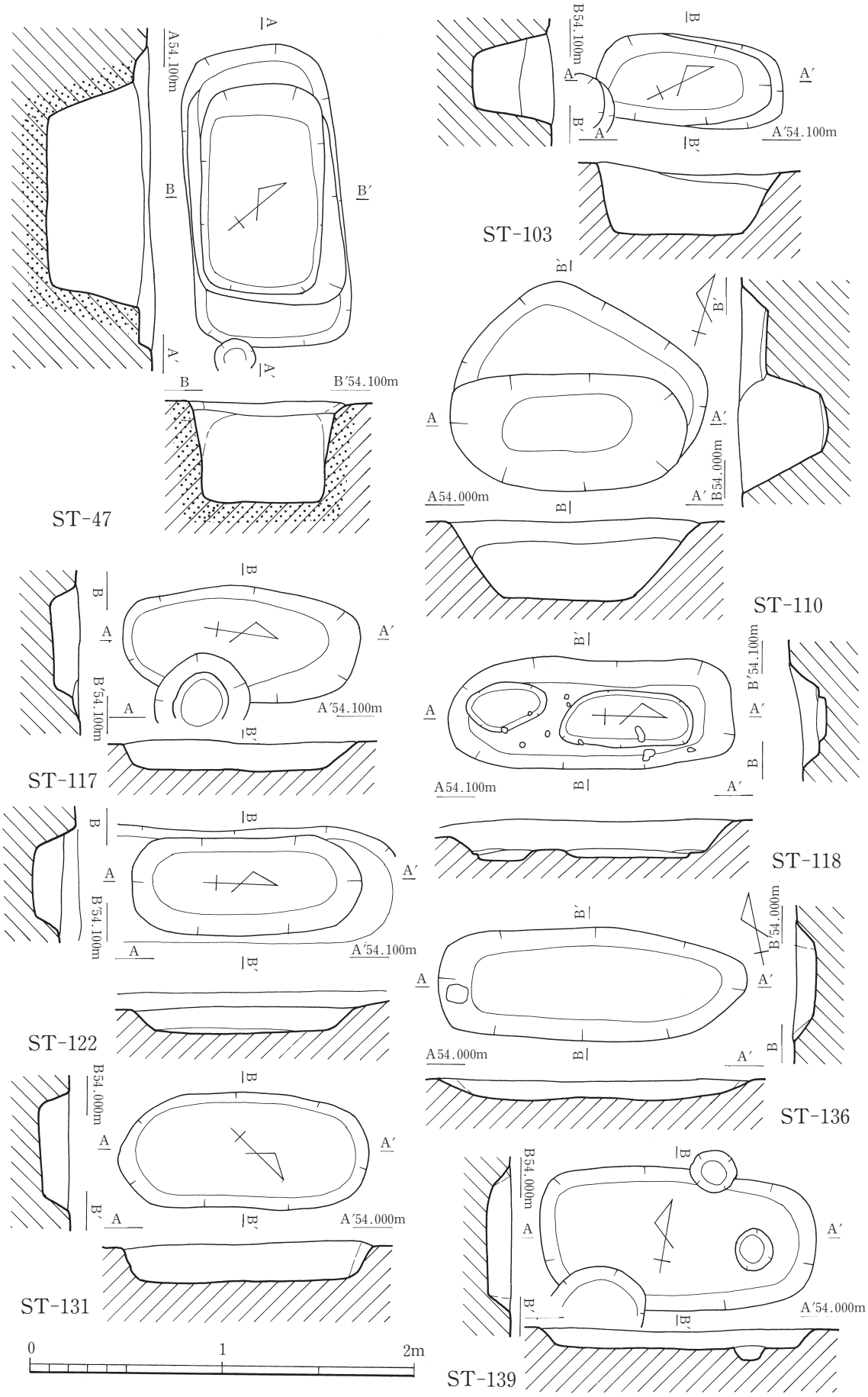
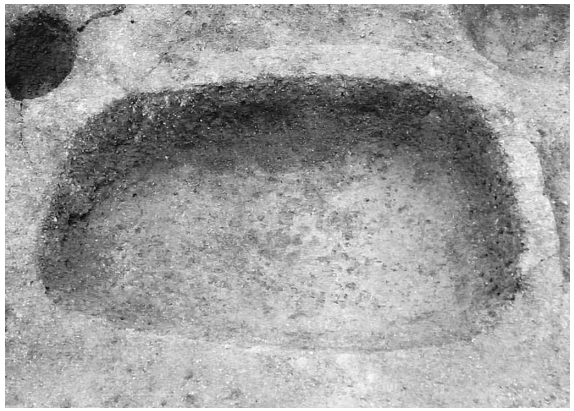


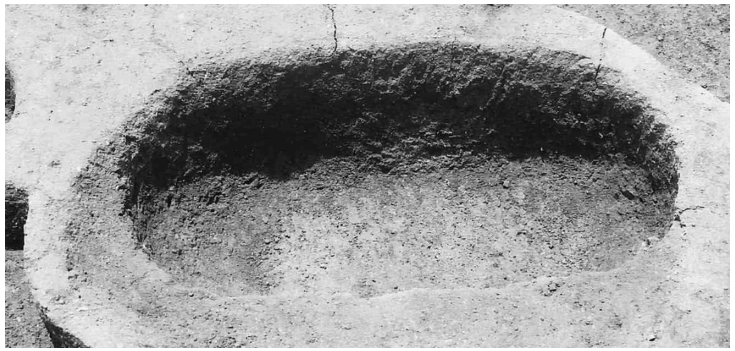
Fig. 11　ST-47・103・110・117・118・122・131・136・139実測図（S1/30）



ST-43

ST-05

ST-28



ST-110

ST-131

ST-34

PL. 7　ST-05・28・34・43・110・131

④ SD（溝状遺構）

SD-03

調査区の北端の段のへり近くにあってSK-01に切られる。ほぼ南北に走り、南側は下段へと続いていた可能性がある。現長5.0m、幅は北側が70cm、南側が50cmを測る。壁は緩やかに斜めに立ち上がる。断面形状はU字型を呈す。遺物は土師器の細片が出土した。

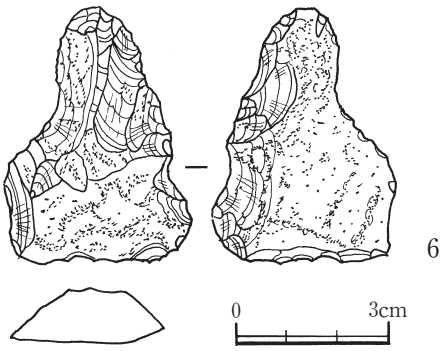


Fig. 12　SD-02出土石器実測図（S 2/3）

SD-04

北西から南にほぼ直線的に2.5m走る不連続な溝である。北西側の幅は30cm、南側では15cmの幅となり、ここで完結する。壁は底面から緩やかに立ち上り断面形状逆台形をなす。

SD-08

SD-7に並行する。平面プランは、細長い土坑状を呈す。幅は25cm、長さ5.7mを測り、完結する。断面形状は逆台形状となる。

SD-09

西から東へ僅かに蛇行しながら2.5m程走り、トレンチに切られる。溝の幅は西側で30cm、やや広がりながらトレンチ側へ延びる。トレンチより東側では、遺構の続きを確認できなかった。ここには谷状に窪んだ地形が見られる事から、溝の続きは自然地形を利用しただけかも知れない。

SD-21

調査区のほぼ中央の東側に位置する。トレンチの東にあって、やや蛇行しながら南北に走り、SD-9の続く自然地形まで21.8mを測る。溝は広い所で60cm、狭い所は20cmの幅となる。調査区のなかでは最長の溝で、段上のへりに沿って掘られている。

SD-33

SD-21の東にあって台地の縁を蛇行しながら南北に走る。SK-101を切る。北側の溝の始まり部分は幅25cmと深さ９cmを測る。この始まりから南東方向に蛇行しながら13.75mの長さまで延びて完結。この部分は角張らず丸く収まり、幅12cm前後と狭くなって、深さも浅くなる。断面形状は逆台形を呈す。

SD-50

調査区の南端で検出。西側から４m程北東に向かい屈曲部となる。屈曲部から北方向に向きを変えてさらに５m続き完結する。形状は緩やかな「く」の字状となる。幅は西側で80cm、屈曲部分が１m、北東部分では80cmと狭くなる。底の深さは差異がなく平坦で、断面形状は浅いU字状をなす。床面で検出されたPitは溝に伴わない。

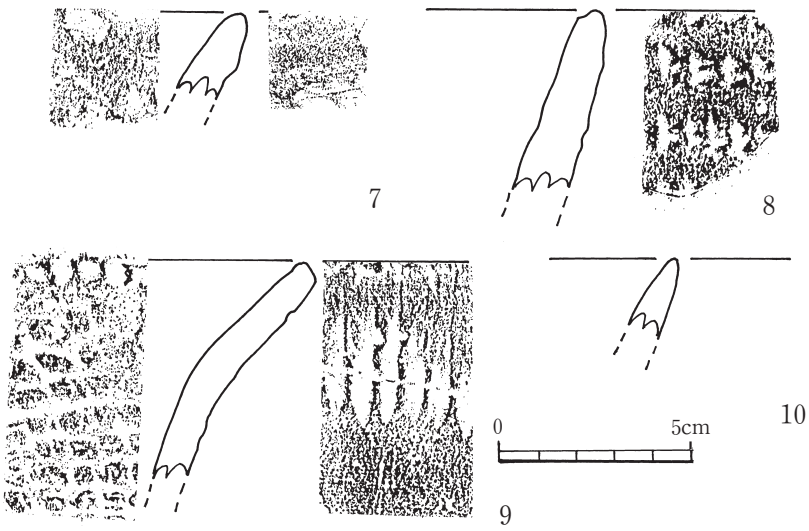


Fig. 13　Pit出土遺物実測図（S 1/2）

SD-57

SD-21の東側で検出され、並行して南北に7.5mほど走る。幅は20cmで、壁の断面形状は逆台形となる。北側部分でSD-89と重複。

SD-89

SD-57に重複した部分からSD-88を切り、やや西よりに向きを変え5.6m走り完結し、Sの-35を切る。溝の幅は20cmで、断面形状は逆台形となる。

SD-105

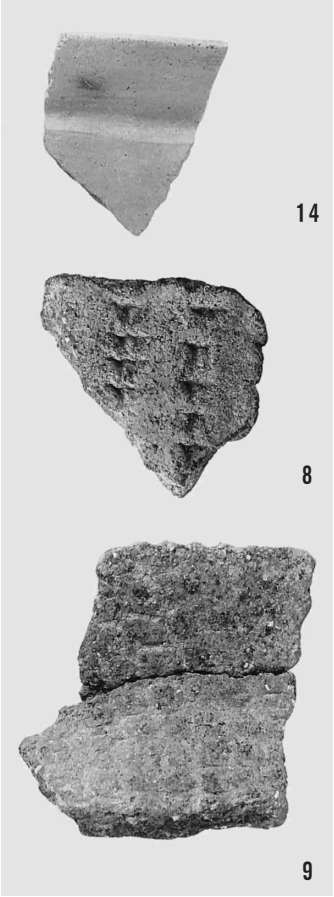
トレンチに切られ、SI-55を切る。北西から南東方向に7.3m走り床面は北西側が深く、南東側が浅くなる。北西は１m、床面にはPitが多く検出されたが、溝に伴うものは少ない。平面形状は長い土坑状をなし、断面形状は浅いU字状を呈す。

SD-125

SD-105の西側で検出。やや蛇行しながらほぼ南北に４mほど走り完結する。幅は22～28cmを測り、深さは南側が僅かに深くなる。断面形状は逆台形を呈す。

SD-144

調査区の南端で検出。ほぼ直線で南北に7.2m走り、南側は調査区外へ延びる。幅は30cmを測り、底面の深さは南側に向かい深くなる。壁は垂直に近く立ち上がり、断面形状は逆台形を呈す。



PL. 8　Pit出土遺物

⑤ Pit（柱穴）

多くのPitを検出したが埋土や大きさ等に違いがあり掘立柱建物跡としてまとまるものはなかった。

出土遺物

調査の内容で述べたように縄文時代の土器片が集中する範囲内にあるPitから出土したものである。**7**はPit212出土の押し型文深鉢の口縁部片で、器表面は摩滅が著しい。外面には楕円押し型文を施し、内面には施文はない。内面は灰黄褐色10YR6/2、外面、褐灰色10YR5/1の色調を呈し、焼成は普通である。**8**は深鉢の口縁部付近の破片で、外面に貝殻縁による刺突文を施し、内面の施文はない。色調は内面褐灰色10YR6/1、外面にぶい黄橙色10YR7/2をなし、焼成は普通。Pit265より出土した。**9**はPit393より出土した深鉢の口縁部の破片である。内外面の色調は、にぶい褐色7.5YR6/3を呈し、胎土には４cm以下の雲母片が多く含まれて、焼成は普通。外面には楕円形の押し型文が施文し、内面には貝殻縁による刺突文が連続して施される。口縁部は胴部境からラッパ状に外に開いている。**10**は器表面の摩滅が著しい深鉢の口縁部片で内外面には施文は見られない。内面、灰黄褐色10YR6/2、外面にぶい橙色7.5YR6/4の色調で、焼成は普通である。**11**は二等辺三角形の形態を呈す石鏃で、広義の剥片鏃と思われる。石材には黒曜石が使用されている。**12**はサヌカイト製の石鏃で、抉りは浅い、広義の剥片鏃である。

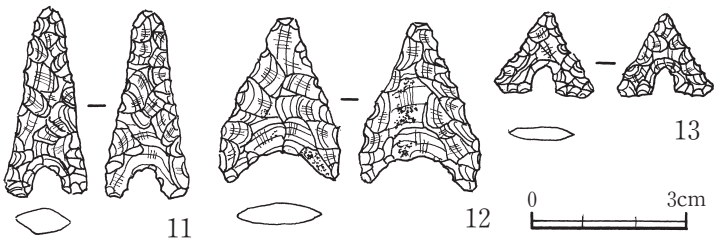


Fig. 14　Pit出土石鏃実測図（S 2/3）

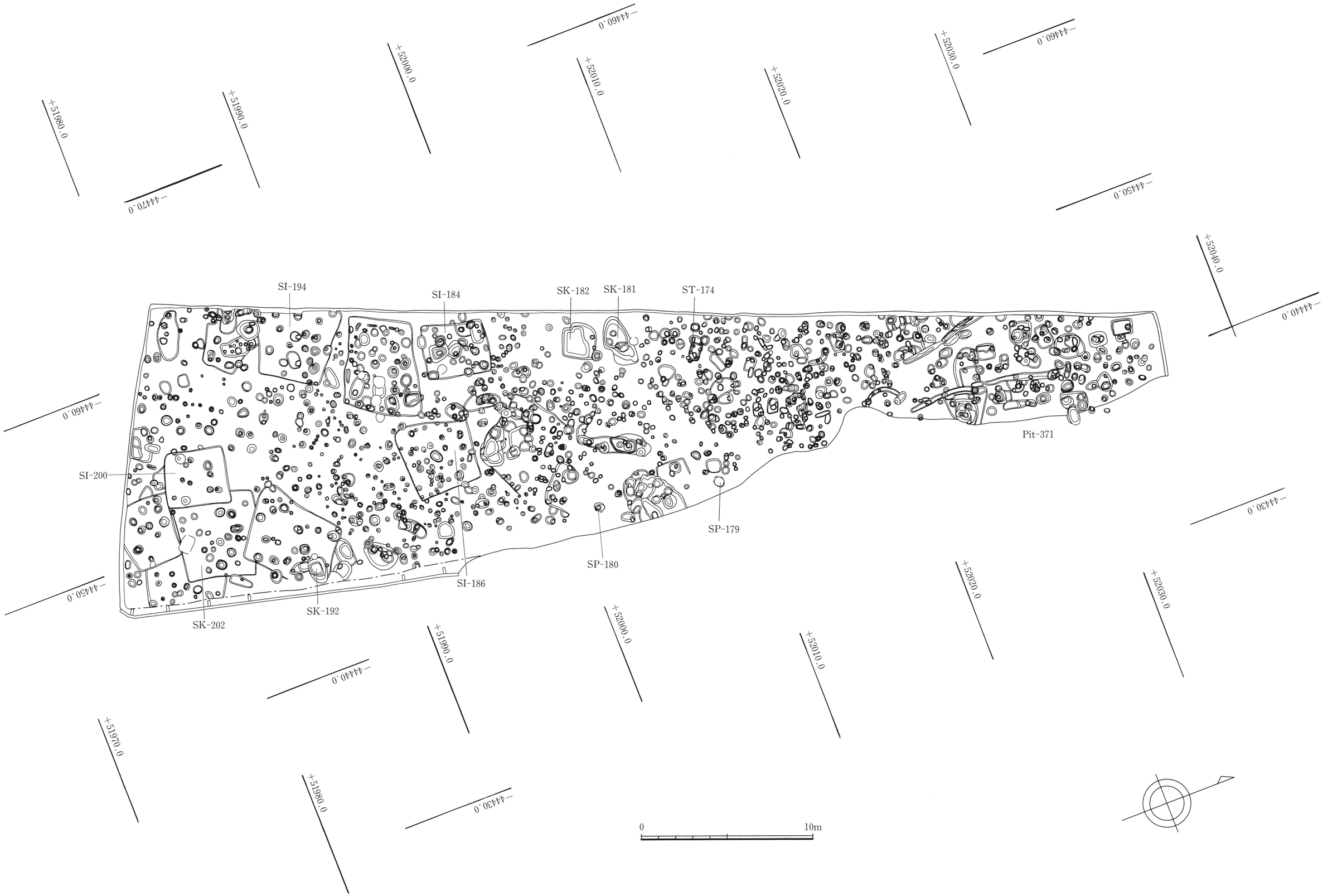


Fig. 15　下面遺構配置図（S1/200）

PL. 9　下面全景

下面の遺構

遺跡内の基本層は、位置と環境で述べた様に脊振山塊の山裾に立地するため、花崗岩バイラン土がベースとなっている。Ⅰ・Ⅱ次の調査地周辺は山裾に近い場所であったが、今回の調査区は旧河岸段丘としての景観を僅かに留めている場所である。旧地形を考えると現在の県道（平等寺～筑紫野線）のすぐ横の調査対象外の田が旧河川のへりであった可能性は想定できる。

① SI（竪穴住居跡）

SI-67

SI-73の東側で検出。西側壁は直線で2.5mを測り、コーナー部は丸みを持つ。主軸はN-47°-Wにとる。平面は隅丸長方形または隅丸方形を呈し、検出されたSIの中では小型である。

SI-73

調査区のほぼ中央付近で検出され、SK-183を切る。東側にSI-67が位置するが新旧関係は確認できなかった。東側壁を除く三方の壁が残る。主軸をN-32°-Wにとり、側壁は三方とも蛇行し、深さ12～20cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。床面は平坦で、中央付近に踏みしめと汚れが目立つ。主柱穴は北・西・南側壁からほぼ同距離にあるPitを想定し４本柱とした。柱心心間は東西1.2m、南北1.12mとなる。

SI-75

調査区の東南端にあって東コーナー部をSK-192に切られ、SK-190とSI-202を切る。平面は不整長方形をなし、主軸をN-44°-Eにとる。壁は緩やかに斜めに立ち上り、深さは10cm前後となる。床面は平坦で、中央付近に汚れや踏みしめが顕著となる。

SI-184

調査区の南東、未調査区との境付近で検出され、主軸をN-16°-Eにとる。南北壁長3.14m、東西壁長3.9mを測り、平面は寸詰まりの隅丸長方形の形状を呈す。壁の深さは３cmしかない。

SI-185

SI-184の南にあって、主軸をN-64°-Eにとる。不整の長方形の平面形状を呈す。壁の残りは悪く３cmしかない。西・南壁側には、幅10～25cmの壁溝が残る。しかし壁溝は全周せず不連続である。

SI-186

SI-185の東側にあり、SK-195に切られる。北・南・東側壁は直線だが東壁は蛇行し、不整な方形の形状を呈す。壁は３cm程度の深さしかない。床面は平坦で、中央付近に踏みしめや汚れが目立つ。

SI-194

調査区の南端、未調査区へ続く。SK-196に切られる。主軸をN-55°-Wにとり、側壁長4.1～4.4mの不整形な形状を呈する。床面は平坦で中央付近が踏みしめと汚れが顕著である。壁は斜めに立ち上がり、深さは６cm前後と残りは悪い。

SI-205

調査区南東端にあって、SI-202・203に切られる。また東壁側が台地の縁にあるため、規模・形状の詳細は不明。床面は平坦で、SI-202に重複する箇所の汚れや踏みしめが目立つ。

SI-214

SI-194とSI-75の遺構の希薄な部分にある。プランの検出はできなかったが、円形住居跡と考えられる。主柱穴と考えたPitの中心付近は汚れや踏みしめが確認でき、平坦である。

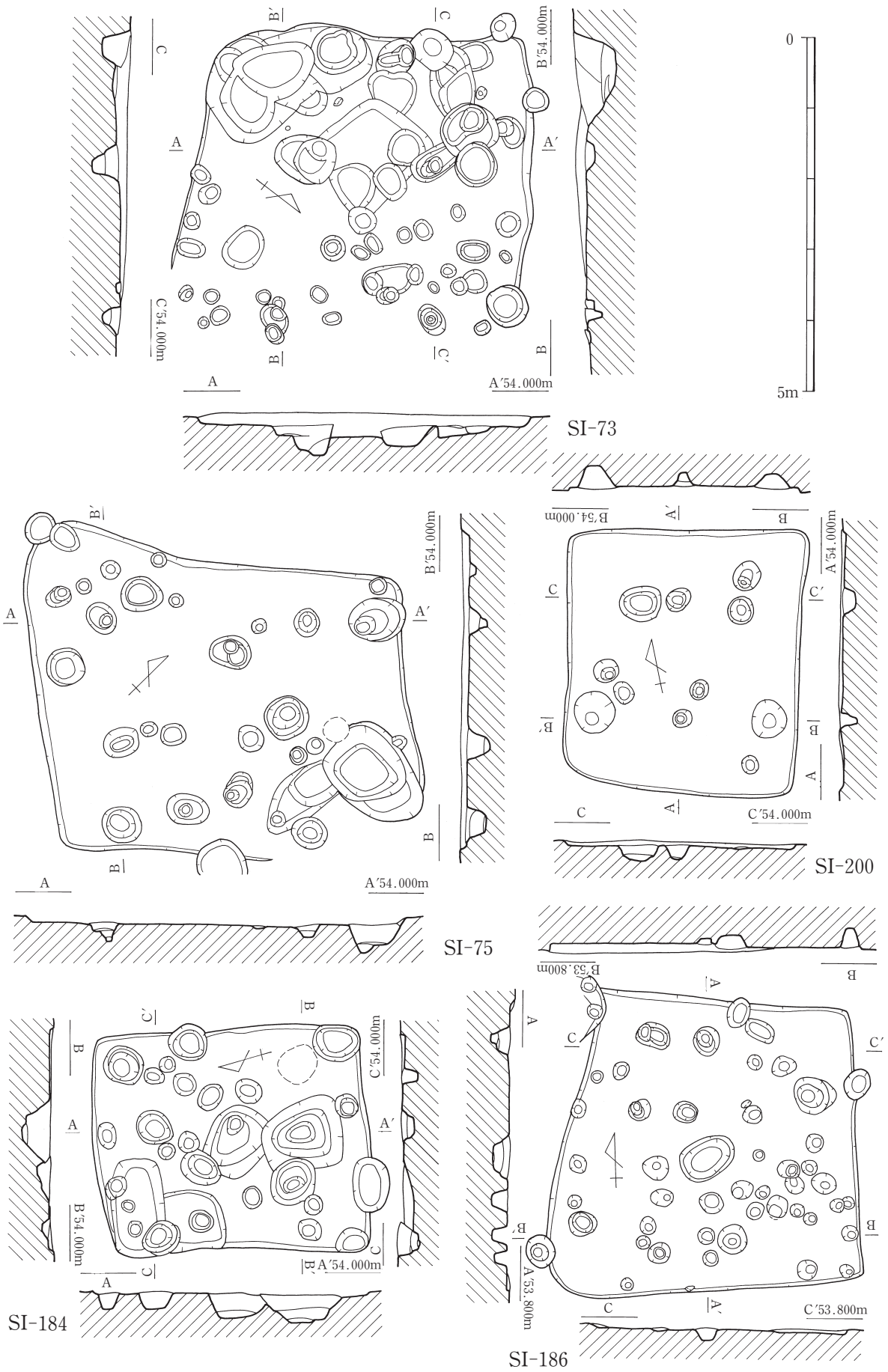


Fig. 16　SI-73・75・184・186・200実測図（S1/80）

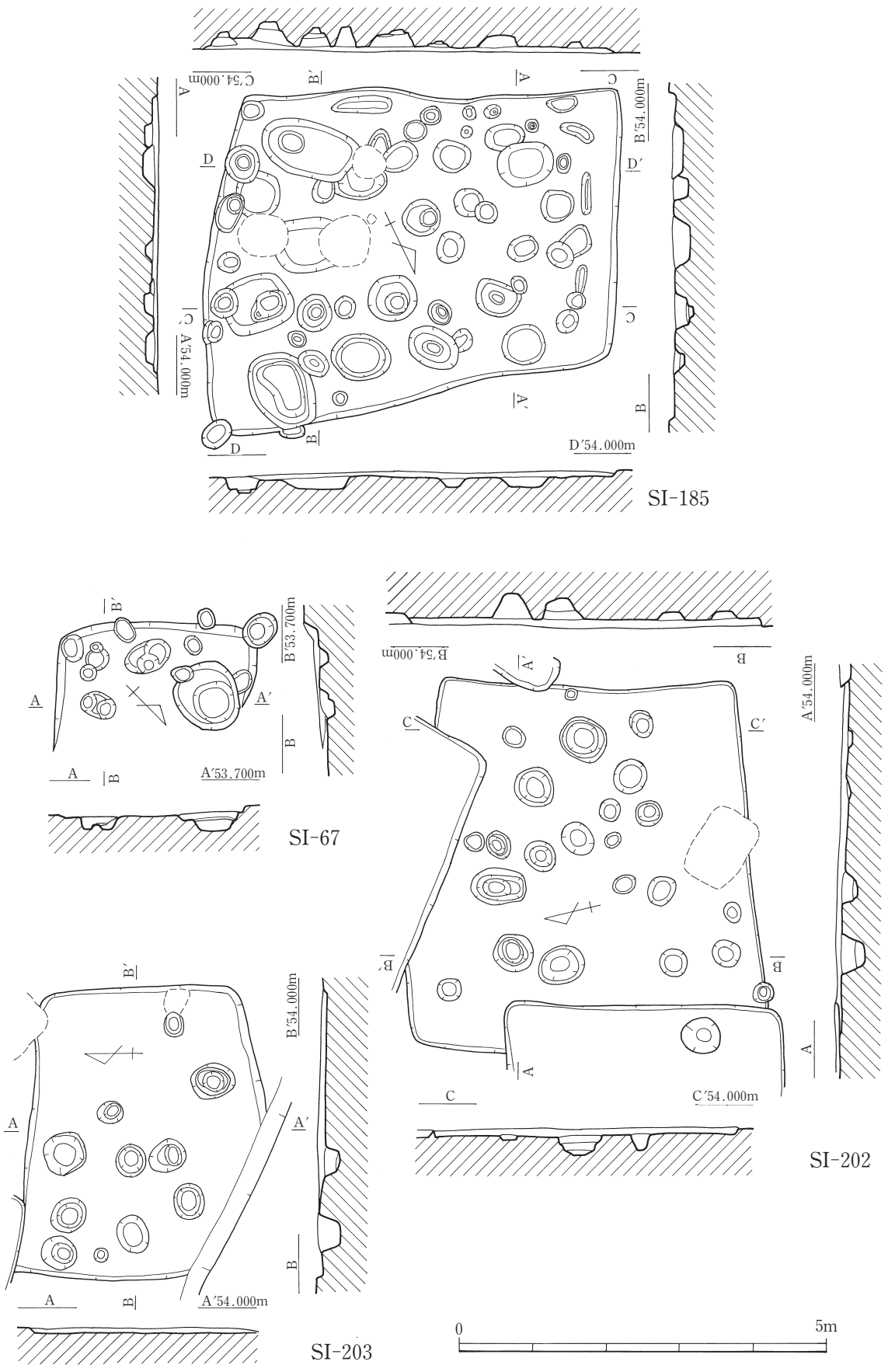
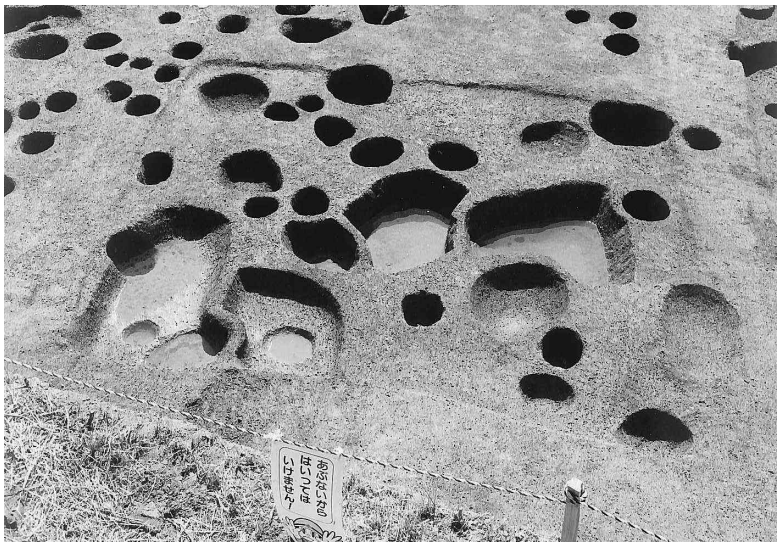
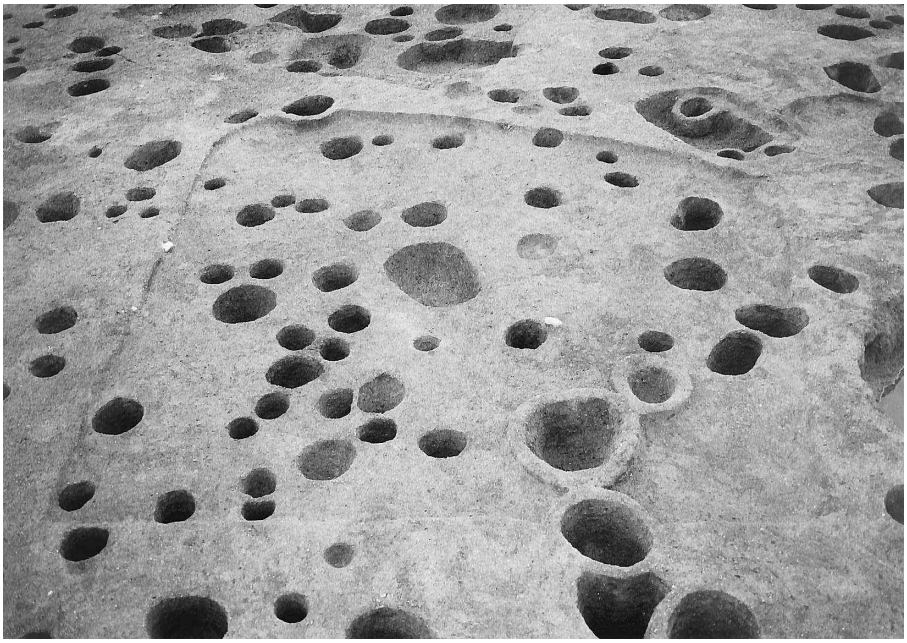


Fig. 17　SI-67・185・202・203実測図（S1/80）



SI-184



SI-186

SI-194

PL. 10　SI-184・186・194

SI-200

SI-202

PL. 11　SI-200・202

表-1　SI一覧表

号	Fig番号	形　状	大きさ(m) 長	幅	深	主柱穴数	面積(m²)	方　位	出土遺物	備　考	
38	4	不整長方形	4.73	3.10	0.26～0.34	不明	14.66	N-13°-E	須恵器・土師器 青磁・不明鉄器 黒曜石・サヌカイト	S 37・97・pitを切る S 25・pitに切られる	上面
52	4	長方形 または 方形	3.40＋α	2.42	0.07～0.16	4	8.23＋α	N-21°-E	須恵器・土師器・黒曜石	pitを切る S 51・106・pitに切られる	上面
55	4	不整隅丸方形	2.79	2.74	0.08～0.20	2	7.64	N-22°-W	須恵器・土師器・黒曜石	S 61を切る S 105・106に切られる	上面
67	17	隅丸長方形 または 隅丸方形	2.54＋α	1.70＋α	0.02～0.20	2	4.32＋α	N-47°-W	弥生土器	pitを切る pitに切られる	下面
73	16	不整方形	4.72	4.32	0.12～0.20	4	20.39	N-32°-W	土師器・弥生土器・黒曜石	S 183・pitを切る 中にS 74あり	下面
75	16	不整長方形	5.32	4.54	0.04～0.10	4	24.15	N-44°-E	須恵器・土師器・黒曜石 サヌカイト	S 190・202を切る S 192・pitに切られる	下面
106	4	不整隅丸方形	2.84	2.80	0.10～0.18	不明	7.95	N-42°-E		S 54・pitに切られる S 52・55・pitを切る	上面
184	16	隅丸長方形	3.90	3.14	0.03	2	12.25	N-16°-E		pitに切られる pitを切る	下面
185	17	不整長方形	5.38	3.78	0.03	4	20.33	N-64°-E		pitに切られる pitを切る 中にS 126・127tあり	下面
186	16	不整方形	4.44	4.12	0.03	2	18.29	N-2°-E		S 195・pitに切られる pitを切る	下面
194		不整形	4.42＋α	4.10	0.06	2	18.12＋α	N-55°-W		S 196・pitに切られる S 197を切る 未調査区へ続く	下面
200	16	方形	3.70	3.30	0.04～0.08	2	12.21	N-13°-E		S 201・202・203・pitを切る	下面
202	17	方形	4.76＋α	4.72＋α	0.04～0.14	4	22.47＋α	N-14°-E		S 47・75・200・206・pitに切られる S 205を切る	下面
203	17	不整形	3.88	3.20＋α	0.04～0.15	不明	12.42＋α	N-89°-W		S 47・200に切られる 未調査区へ続く S 204・205を切る	下面
205		不明	2.18＋α	4.62	0.08～0.13	不明	10.07＋α			S 202・203に切られる 未調査区へ続く	下面

② SK（土坑）

SK-154

調査区の北端で検出。東・西壁長1.2m、北・南壁長0.88mを測り、平面は隅丸長方形の形状を呈す。主軸はN-13°-Eにとる。壁は垂直に近く立ち上がり、深さは30cm前後を測る。北側の床面に径38cmのPitがある。床面はPitに向かってやや深くなる。

SK-181

調査区の中央付近の西端にあって、主軸をN-84°-Eにとる。形状は不整形を呈す。土坑が重複した可能性もあったが土層からは確認できなかった。東側の壁は斜めに立ち上がり、それからテラス状の床になり、再び緩やかに上場へと立ち上がる二段の壁を持つ。西壁は斜めに立ち上がるが東壁の様にテラスはなく、稜線として変化を見せる。床面は東側に向かい低くなりPitをともなう。

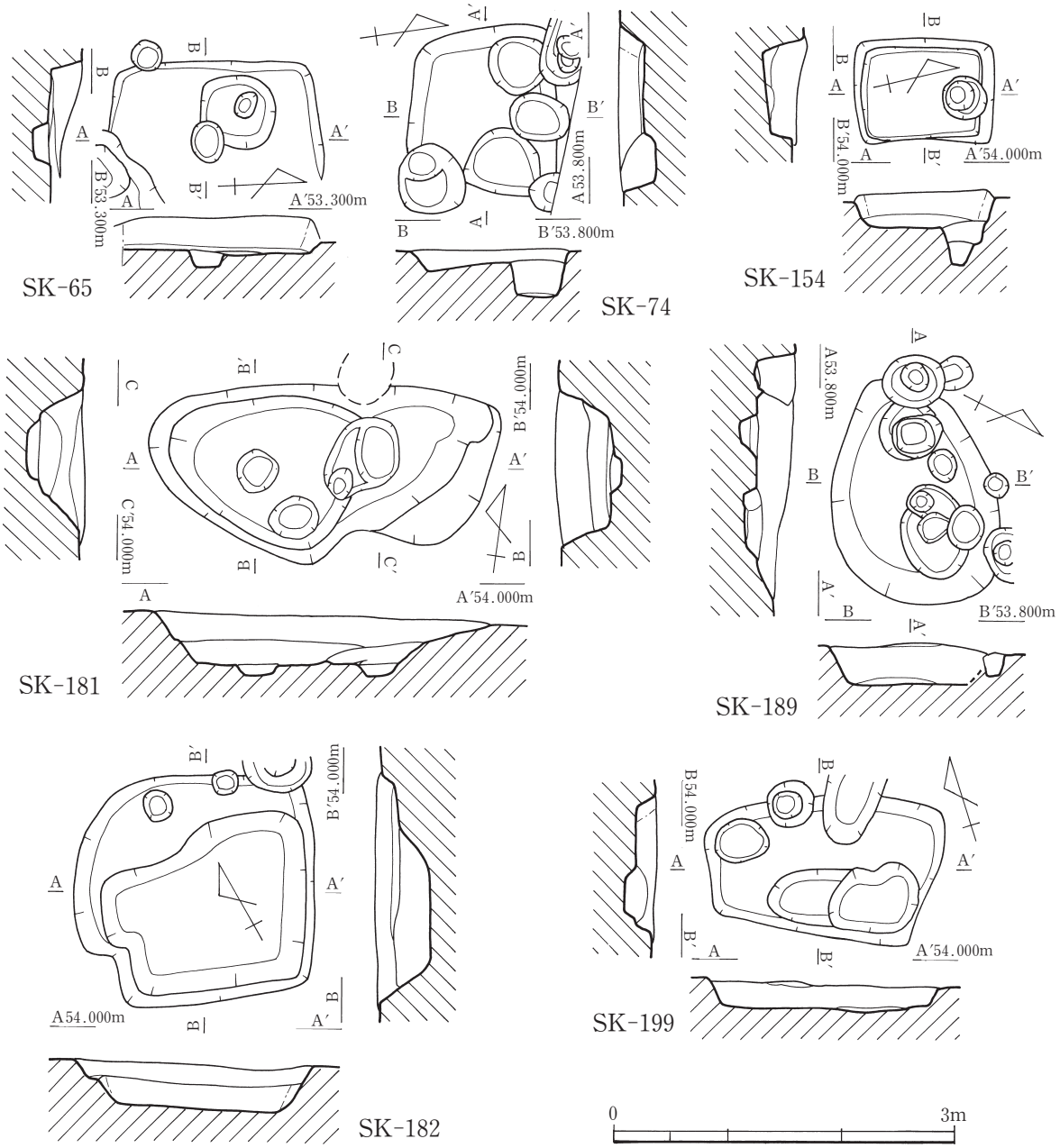


Fig. 18　SK-65・74・154・181・182・189・199実測図（S1/60）

SK-182

SK-181に隣接し、主軸をN-60°-Wにとる。SK-181と同様に２基の土坑の重複を考えたが、土層からは確認できなかった。床面は平坦で、南側壁は緩やかに斜めに立ち上がる。北側壁は斜めに立ち上がり、そこから緩やかなテラス状の床を持ち上場へ向かい二段の構造となる。

SK-189

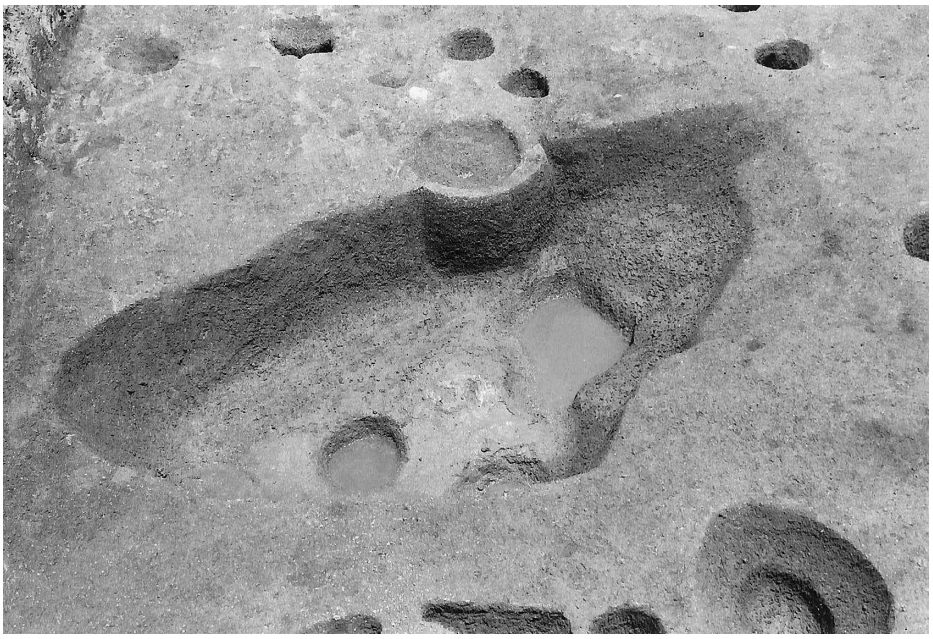
SK-190に近接し、台地の縁にある。主軸をN-63°-Eにとり、形状は楕円形を呈す。南北壁が長軸で2.1m前後を測る。壁は緩やかに斜めに立ち上がり、深さ30cmの平坦な床面になる。

SK-190

SI-75とSK-190に切られる。平面は隅丸長方形で、長さ1.9m、幅１m、深さ９cmを測る。

SK-195

SI-186を切る。平面は寸詰まりの隅丸長方形を呈す。北・南壁側が長辺で1.4mを測り、幅0.92m



SK-181

SK-182

SK-192

PL. 12　SK-181・182・192

表－2　SK一覧表

号	形　状	大きさ(m)			面積(m²)	出土遺物	備　　考
		長	幅	深			
1	不整形	2.12＋α	1.72	0.12～0.46	3.65＋α	須恵器・土師器・青磁	S3・76を切る。未調査区へ続く。
2	不整長方形	3.49	1.65	0.17～0.19	5.76	須恵器・土師器	pit35・44を切る。pit32・試掘トレンチに切られる。中にpitあり。
17	不整形	2.65＋α	0.64＋α	0.22～0.24	1.70＋α	須恵器・土師器・青磁・黒曜石	試掘トレンチに切られる。中にpitあり。
18	不整長方形	1.90	1.25	0.25～0.28	2.38	須恵器・土師器・黒曜石・サヌカイト・玉	中にpitあり。
25	隅丸長方形	2.03	2.1	0.08～0.21	3.25	須恵器・土師器・白磁	S38・99・pitを切る。pitに切られる。
37	不整形	1.48＋α	1.65	0.08 0.10	2.44＋α	土師器・サヌカイト	pitを切る。S38・pitに切られる。中にpitあり。
39	隅丸長方形	1.82	1.45	0.14 2.64		土師器・黒曜石	S116・pitを切る。中にpitあり。
48	隅丸方形	1.02	0.93	0.10	0.95	須恵器・土師器・黒曜石	pitを切る。中にpitあり。
51	不整隅丸長方形	1.68	1.24	0.05～0.10	2.08	土師器・黒曜石	S52を切る。中にpitあり。
53	不整形	1.35＋α	1.12	0.07～0.08	1.51＋α	須恵器・土師器	S49・50・142・pitに切られる。中にpitあり。
54	隅丸長方形	2.20	1.38	0.18～0.22	3.04	須恵器・土師器・弥生土器・鉄滓	S58・106・pitを切る。pitに切られる。中にpitあり。
58	不整形	3.48	1.95	0.05～0.07	6.79	土師器・サヌカイト・鉄鏃	S62を切る。S54・104・pitに切られる。中にpitあり。
61	不整長方形	2.22	1.23＋α	0.05～0.10	2.73＋α	弥生土器	pitを切る。S55・pitに切られる。中にpitあり。
65	不整長方形	1.74＋α	1.02＋α	0.06～0.28	1.77＋α	土師器	S68・pitに切られる。中にpitあり。
69	不整方形	1.47＋α	1.28	0.19～0.32	1.88＋α	土師器	S71の中にある。pitに切られる。未調査区へ続く。
71	不整形	2.06＋α	1.47＋α	0.07～0.08	3.03＋α	縄文土器・土師器	S162に切られる。中にpitあり。未調査区へ続く。
72	不整形	2.25＋α	1.34＋α	0.08～0.26	3.02＋α	縄文土器・土師器	S162・163・164・pitに切られる。中にpitあり。
74	不整形	1.44	1.40＋α	0.03～0.20	2.02＋α	弥生土器	pitを切る。S73の中にある。pitに切られる。
85	楕円形	0.80	0.47	0.21	0.38	石鏃	S32を切る。
87	不整形	0.95＋α	1.60	0.15	1.52＋α		S21・試掘トレンチに切られる。中にpitあり。
90	不整長方形	1.12	1.04	0.15～0.37	1.16		pitを切る。中にpitあり。
91	不整長方形	1.20	0.96	0.02～0.05	1.15		中にpitあり。
94	楕円形	0.97	0.75	0.31	0.73		
95	不整方形	1.00＋α	0.97＋α	0.24～0.25	0.97＋α		S23・24を切る。未調査区へ続く。
96	隅丸方形	1.13	1.06	0.22～0.24	1.20		pitに切られる。中にpitあり。
97	不整長方形	0.96＋α	0.85	0.35	0.82＋α		S38・pitに切られる。
98	方形	0.85	0.80	0.12	0.68		S23・24・pitを切る。中にpitあり。
99	不整形	0.45＋α	0.89	0.14	0.40＋α		pitを切る。S25に切られる。
101	不整形	1.10	0.88	0.07～0.23	0.97		pitを切る。S33に切られる。中にpitあり。
104	不整方形	0.85	0.74	0.28	0.63		S58を切る。pitに切られる。
107	不整楕円形	1.27	0.81	0.10～0.13	1.03		pitを切る。
109	方形	0.63	0.60	0.09～0.12	0.38		pitを切る。中にpitあり。
111	不整形	1.82＋α	1.25	0.09～0.10	2.28＋α		S31・113・pitに切られる。中にS112あり。
112	楕円形	1.16	0.81	0.09～0.20	0.94		S111の中にある。
113	不整形	1.00	0.64	0.26	0.64		S111を切る。pitに切られる。
114	長方形	0.90	0.45	0.12	0.41		pitに切られる。中にpitあり。
115	隅丸長方形	1.12	0.87	0.10～0.23	0.97		pitを切る。
116	不整形	1.72	0.86＋α	－	1.46＋α		S119を切る。S39・117に切られる。中にS118あり。
121	不整形	1.34	0.80	0.05	1.07		S120を切る。pitに切られる。中にpitあり。
123	長方形	0.76	0.60	0.17	0.46		S40・pitを切る。
124	不整形	0.99	0.83	0.26～0.31	0.82		

表-2　SK一覧表

号	形　状	大きさ(m)			面積(m²)	出土遺物	備　　考
		長	幅	深			
126	方形	0.90	0.82	0.44	0.74		pitを切る。
127	不整形	0.75＋α	0.79	0.47	0.59＋α		S105に切られる。
128	隅丸長方形	0.64	0.55	0.38			
129	楕円形	1.02	0.76	0.22～0.34	0.78		S57を切る。
130	不整隅丸方形	1.38	1.14	0.04～0.09	1.57		pitを切る。中にpitあり。
132	不整形	0.50＋α	0.79	0.35	0.20＋α		pitを切る。未調査区へ続く。
137	不整隅丸長方形	3.06	1.30	0.27～0.32	3.98		pitを切る。S138・pitに切られる。
138	不整隅丸長方形	1.27	0.91	0.17～0.18	1.16		S137に切られる。
145	方形	1.38	1.36	0.12	1.88		S146・151・pitを切る。pitに切られる。
147	不整形	2.90	1.35	0.06	3.91		S45・153に切られる。
152	不整形	0.17＋α	0.62	0.08～0.14	0.66＋α		S144に切られる。中にpitあり。
154	隅丸長方形	1.20	0.88	0.24～0.40	1.06		pitを切る。中にpitあり。
155	不整形	1.24	0.80＋α	0.19	0.99＋α		pitに切られる。中にpitあり。
156	不整形	1.80	1.44	0.18	2.60		pitに切られる。中にpitあり。
157	不整形	1.80	1.49	0.09	2.68		pitを切る。pitに切られる。中にpitあり。
158	不整形	1.86	1.08	0.08	2.01		pitを切る。pitに切られる。中にpitあり。
159	不整形	1.50	1.27	0.08	1.33		pitに切られる。中にpitあり。
160	不整長方形	1.36	0.64＋α	0.08	0.87＋α		pitに切られる。中にpitあり。
161	隅丸長方形	1.05	0.87	0.50～0.64	0.91		pitを切る。中にpitあり。
163	不整形	1.15＋α	1.10	0.18	1.27＋α		S72を切る。S162・pitに切られる。中にpitあり。
164	隅丸長方形	1.07	0.94	0.10	1.01		S72を切る。pitに切られる。中にpitあり。
166	不整形	1.07＋α	0.60＋α	0.66	0.64＋α		S167を切る。S165に切られる。未調査区へ続く。
169	長方形	1.17	0.76	0.06～0.09	0.89		pitに切られる。中にpitあり。
171	不整形	0.66＋α	0.56＋α	0.16～0.19	0.37＋α		pitを切る。中にpitあり。pitに切られる。
172	不整形	1.91	1.07	0.01～0.08	2.23		中にpitあり。
175	不整形	1.32＋α	0.90	0.06	1.19＋α		S176・pitに切られる。中にpitあり。
176	不整円	0.91	0.66	0.04	0.60		S175を切る。中にpitあり。
177	不整円	1.04	0.89	0.06～0.12	0.93		pitを切る。pitに切られる。
178	方形	0.87	0.86	0.01～0.14	0.75		
181	不整形	2.95	1.45	0.42～0.47	4.28		S96のpitに切られる。中にpitあり。
182	不整形	2.08	2.04	0.10～0.50	4.24		pitに切られる。中にpitあり。
183	不整形	2.35	1.55	0.38～0.52	3.64		S73を切る。中にpitあり。
187	不整形	0.98	0.95	0.08～0.20	0.93		
188	不整形	1.49＋α	0.73	0.04～0.11	1.09＋α		pitに切られる。中にpitあり。
189	楕円形	2.18	1.54	0.08～0.37	3.36		pitに切られる。pitあり。
190	隅丸長方形	1.90＋α	1.05	0.09	1.70＋α		S75・191・pitに切られる。中にpitあり。
191	不整形	0.85＋α	1.00	0.37	0.85＋α		S190を切る。中にpitあり。
192	不整形	1.58	1.07	0.27～1.00	1.69		S75・pitを切る。S52・pitに切られる。中にpitあり。
195	隅丸長方形	1.40	0.92	0.21	1.29		S186・pitを切る。中にpitあり。
196	不整円形	1.35	1.19	0.17～0.22	1.61		S194・197・pitを切る。中にpitあり。
197	不整形	2.33＋α	2.00	－	4.66＋α		S194を切る。S196・pitに切られる。中にpitあり。未調査区へ続く。
198	不整形	2.93	1.30	0.05	3.81		pitに切られる。中にpitあり。
199	不整長方形	2.00	1.21	0.17～0.24	2.42		pitに切られる。中にpitあり。
201	不整形	1.31	0.68＋α	0.03	0.89＋α		S200・pitに切られる。
204	不整形	0.84	0.62	0.27	0.52		S203に切られる。

となる。床面は北から西側に平坦なテラスがあって二段構造になる。下段の床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、Pitを伴う。

SK-196

SI-194とSK-197を切る。平面は不整円形の形状を呈す。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦となる。床面の中心に径40cmのPitを伴う。

SK-198

調査区の南西端にあって不整な形状をなす。壁の立ち上がりは垂直に近く、床面は平坦で、４個のPitが伴う。深さは５cmと残りは悪い。

SK-199

SI-200の南、未調査区との境にあって不整長方形の形状を呈す。壁の立ち上がりは垂直に近く、深さは20cmを測る。床面は平坦で、重複したPitが検出された。

③ ST（墳墓）

ST-173

調査区ほぼ中央西側にあって、ST-174に近接する。主軸をN-70°-Eにとり、隅丸長方形の形状を呈す。南・北壁が長辺で1.2m、幅は0.5mとなる。床面は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

ST-174

ST-173の南にあって、寸詰まりの隅丸長方形の形状を呈す。検出時に炭や灰、焼土が出土していたためST-47と同様な墳墓を想定したが、壁面への被熱は認められず、炭・灰が堆積しているだけであった。床面の長辺に沿ってPitが検出できたがこの埋土も同様な堆積であった。

ST-193

SI-185とSI-194の間にあって、主軸をN-85°-Wにとる。南・北壁の各々の長さ1.27mを長辺として幅55cmを測る。深さは20cmで、床面は平坦となり、壁の立ち上がりは斜めとなる。

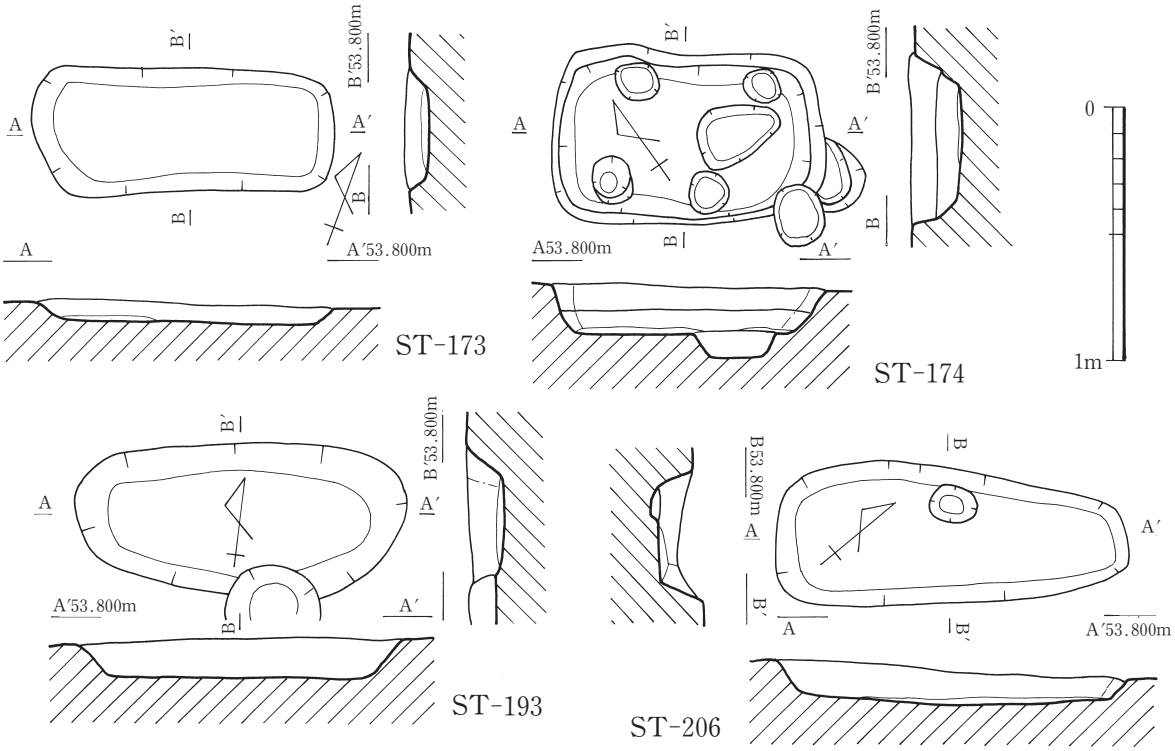
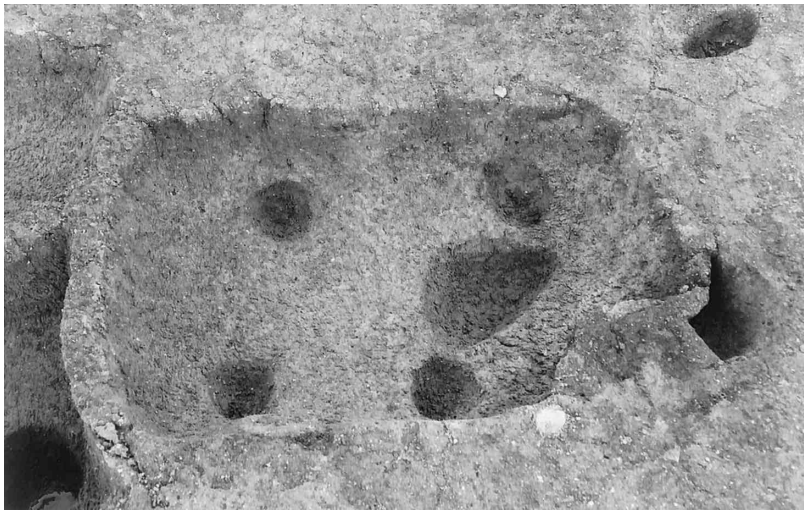


Fig. 19　ST-173・174・193・206実測図（S1/30）



PL. 13　ST-174

表-3　SX一覧表

号	形状	大きさ(m)			面積(m²)	出土遺物	備考
		長	幅	深			
42	不整形	3.72＋α	1.14～3.07	0.17～0.27	11,42＋α	須恵器・土師器・黒曜石	S149・pitを切る。S46・pitに切られる。中にPitあり。未調査区へ続く。
44	不整形	2.65＋α	1.15＋α	0.12～0.15	3.04＋α	須恵器	S153・Pitを切る。S45・144に切られる。
68	不整形	3.00	2.27	0.18～0.45	6.81	須恵器・土師器・黒曜石 弥生土器・磨石	S65を切る。中にPitあり。未調査区へ続く。
140	不整形	1.75＋α	2.35	0.09	4.11＋α		S144・Pitに切られる。
153	不整形	3.30＋α	1.40	0.04～0.08	4.62＋α		S147を切る。 S43～45・149pitに切られる。中にPitあり。
167	不整形	1.95＋α	1.45＋α		2.82＋α		pitを切る。 S165・166・pitに切られる。中にPitあり。未調査区へ続く。

ST-206

調査区南端の台地の縁にあって、SI-202を切る。主軸をN-40°-Eにとり、平面は不整隅丸長方形を呈す。南・北壁の1.38mを長辺として、幅50cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は平坦で、深さ13cmとなる。

④ SP（貯蔵穴）

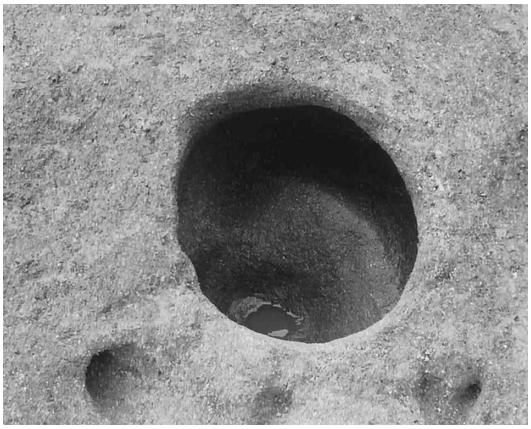
台地の縁に2基検出された。調査区内で縄文時代の遺物の出土もあるため、縄文時代の遺構とも考えられるが、埋土中からは根拠となる遺物は出土していない。

SP-179

調査区のほぼ中央、台地の縁にある。平面は0.5m前後の不整円の形状を呈す。上端部はやや東に片寄るが、床面は西側へ広がる。床面は中心付近が、やや深い皿状で深さは35～40cmを測る。床面の形状は不整な楕円形で長さ0.9m、幅0.75mを測る。床面より10cm前後、壁が立ち上がった所に最大径を持つ小型の袋状竪穴である。最大径部分も東側は角張った壁面となる。西側は丸みを

SP-179

PL. 14　SP-179・180



SP-180

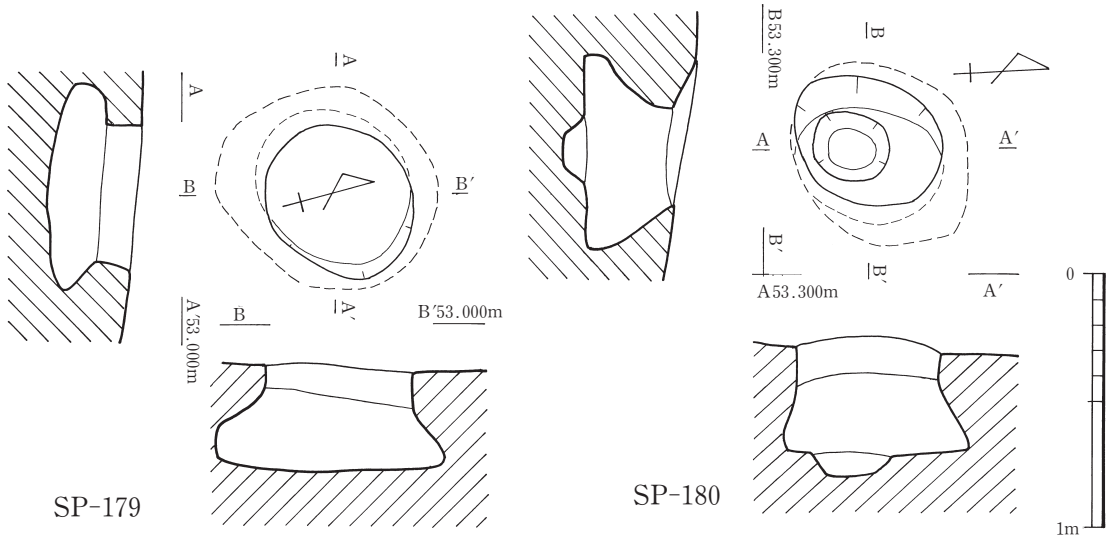


Fig. 20　SP-179・180実測図（S 1/30）

持った壁面で最大径の高さを15cm程度保ちながら上端部に向かい窄まっている。

SP-180

SP-179から７m南にあり、やはり台地の縁に位置する。上端部の平面形状は楕円形で、西に片寄ってあるが、床面は東側に広がりを見せる。床面はやや角のある不整楕円形をなし、深さは35～45cmとなる。最大径は床面にあって0.7～0.75mとなり、床面は平坦で中心より南に寄った所にPitを伴う。壁は床面より10cm程度の高さまでに最大径を保ち、その後上端部に向かい窄まっている。

⑤ Pit（柱穴）

上・下面ともに多くのPitを検出した。遺物は検出分の半数から出土した。総体的に時期が決定できるものは少ない。またPitの中には建物跡の掘り方として、しっかりしたものも見受けられるが、まとまりのあるものは検出できなかった。ただPitの大きさ・埋土・深さなど度外視すれば、１間×２間の建物跡が６棟纏まるが、埋土や大きさ・深さに余りに違いがある事から、ここでは建物跡として扱わなかった。出土遺物は細片だが図示した。

出土遺物

14はPit371から出土した縄文晩期の浅鉢の口縁部で、残存高3.1cmを測る。内外共に、にぶい黄

橙色10YR7/2の色調をなす。胎土には角閃石・赤褐色粒・砂粒を少量含み、焼成は普通。**15**は弥生中期の壺の口縁部。胎土に雲母３mm以下の石英を多く含むが焼成は良い。色調は内外面にぶい黄橙色10YR7/2を呈す。Pit378から出土した。**16**の弥生中期の甕の口縁部は、浅黄橙色10YR8/3の色調を内外ともになす。胎土には雲母３mm以下の石英を多く含むが焼成は良好である。Pit349の出土である。**17**はPit370から出土した須恵器の坏蓋の口縁部で、全体の1/8程度の遺存で残存高0.8

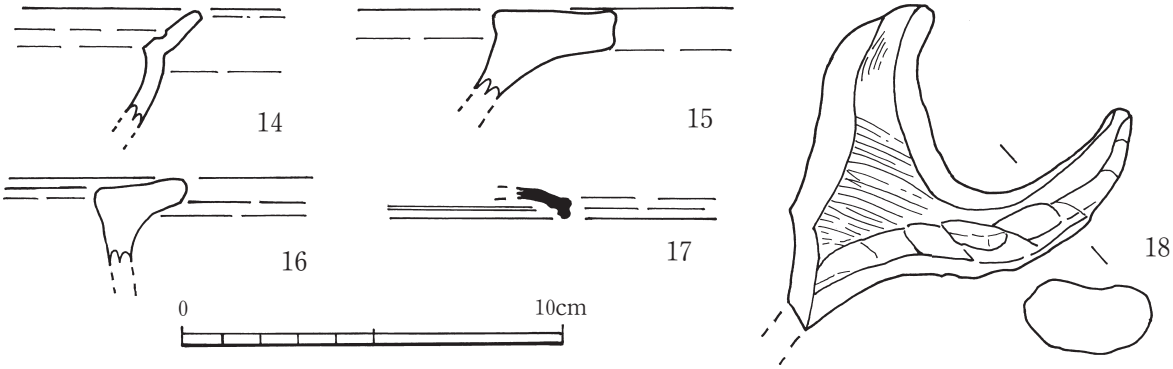


Fig. 21　Pit出土遺物実測図（S1/2）

cmを測る。色調は内外ともに灰色N5/を呈し、焼成は良。**18**はPit338から出土した土師器の甑の取手で焼成は良好。**19**は黒曜石製の鏃でPit340から出土した。二等辺三角形の形態をなし、抉りの深いものである。先端部は欠損している。

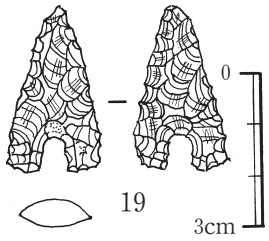


Fig. 22　ＳＸ出土石鏃実側図（S2/3）

⑥ SX（性格不明遺構）

SXとして扱った遺構は６基ある。いずれも形状は不整形で明確なプランにはならない。検出した遺構の中には地形が自然環境により変化した可能性もある。

SX-68

調査区のほぼ中央付近、台地の縁にあり、SP-179とSP-180の間に位置する。SK-65を切る。平面は土坑が重複したような形状をなし、床面も高さの異なる三段構造となる。床面はローム層となり、その上に粗い砂の堆積が確認できた。埋土中には、弥生・須恵器・土師器・黒曜石等の細片が含まれたため遺構として扱った。

出土遺物

20・21はSX-68から出土した。**20**は黒曜石製の石鏃で、二等辺三角形を呈す。抉りは深く先端部が欠けている。**21**は凝灰岩製の磨石で1/2しか残存していない。表･裏面ともによく使用されて平坦面となる。また側面部は敲石としての用途を合わせもっている。現存径６cm、厚み3.5cmを測る。

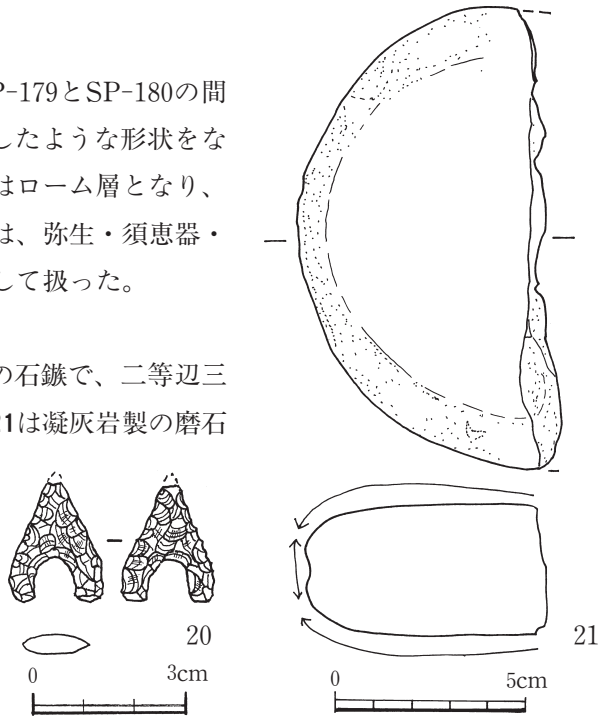


Fig. 23　SX出土石器実測図（S2/3・1/2）

⑦ その他の出土遺物

22・23は表土層からの出土。ともに弥生時代中期の所産である。**22**は壺の口縁部で残存高

2.9cmを測る。内外面が、にぶい橙色7.5YR7/4の色調をなす。胎土に雲母や4mm以下の石英粒を含んでいて、焼成は良好。**23**は甕の底部片で残存高4.2cm、復元底径7.2cmを測り、胎土に2mm以下の石英・雲母を含んで、焼成は良好。内面は灰白色2.5Y8/2、外面は灰黄色2.5Y7/2の色調を呈す。胎土には2mm以下の石英・雲母を含むが、焼成は良い。**24**は下面の剝土時の表採資料である。黒色土器の椀で復元口径15cm、残存高3.9cmを測る。内外面ともに摩滅が著しく、内外面のミガキ調整は不明瞭となっている。内面は黒色N2/で外面は黒色2.5Y2/1の色調を呈す。胎土は少量の雲母・石英が含まれる。焼成は良好である。

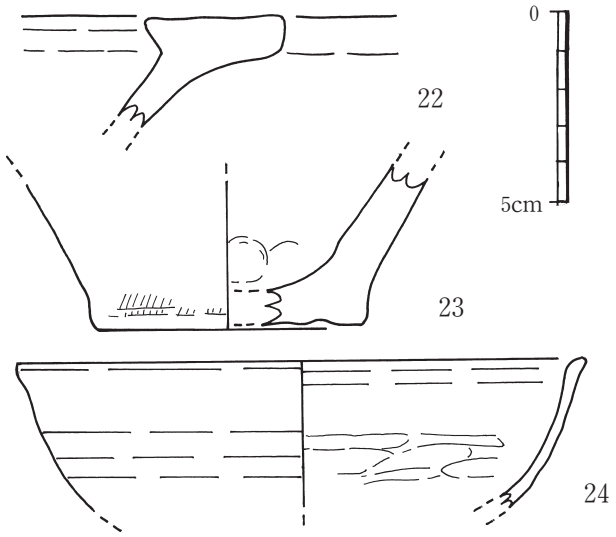


Fig. 24　その他の出土遺物実測図（S1/2）

⑧ 縄文時代包含層の調査について

上・下面の調査において縄文時代の土器片が出土した。出土状況は調査区の全域の遺構に散発的にあった。しかし下面の一部の地山に汚れや黒曜石の砕片が確認できた事から調査の最終段階でグリットを設定し調査を行った。グリットの設定範囲は2基のSPを基準として南北に10mの範囲とした。この範囲からは黒曜石・サヌカイトの砕片や土器の細片が出土するものの層としての厚みは10cm程度しかなく遺構としては捉えられなかった。これらは本来の地形の凹みと考えられる。出土した遺物には図示できるものはなかった。

4．小結

今回も調査区はトドキ遺跡の想定範囲内の1/7程度にすぎないため遺跡全体の性格を決定する事は難しい。ただ今回の調査ではⅠ・Ⅱ次調査では全く出土しなかった時代の土器などの出土を見た。ここでは前段階までの調査と今回の調査で得られた特徴を整理し問題点として提示したい。

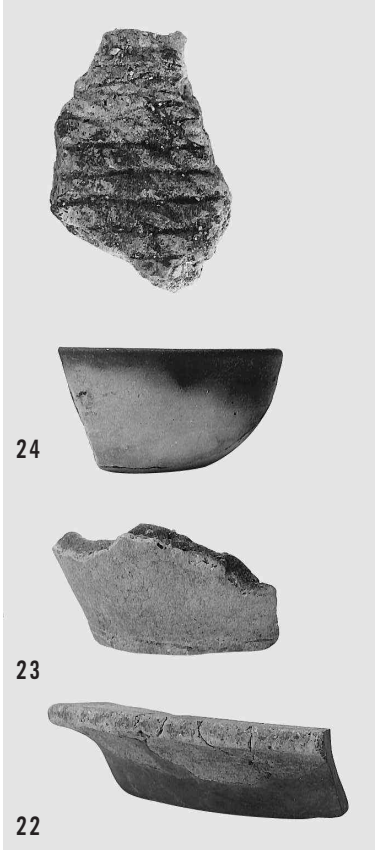
① 今回の調査では、Ⅰ次調査で集落として主体をなした6世紀後半代の遺構はまったく検出されなかった。

② Ⅰ・Ⅱ次調査で確認された弥生時代前期の遺物はまったく出土せず、弥生時代中期の遺物が出土した。

③ 調査区内において縄文時代早期の押し型文の土器の出土があった。

④ 時期が明確でないが墳墓と考えられる遺構が多い。

以上の特徴が、整理できた。



PL. 15　その他の出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とどきいせきⅢ
書名	トドキ遺跡Ⅲ
副書名	
巻次	Ⅲ
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書
シリーズ番号	第84集
編集者名	渡邊和子
編集機関	筑紫野市教育委員会（教育部・文化財課　文化財担当）
所在地	〒818-8686　福岡県筑紫野市二日市西1-1-1　TEL 092（923）1111㈹
発行年月日	西暦2005年3月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
トドキ	福岡県（ふくおかけん） 筑紫野市（ちくしのし） 大字古賀（おおあざこが）	176	361	33° 28′ 04″	131° 28′ 41″	2001.4.10 ～2001.7.31	880m² (1,575.15m²)	農業協同組合支店建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
トドキ	集落 墓地	縄文時代 弥生時代	竪穴住居跡 溝状遺構 土坑 墳墓 貯蔵穴 柱穴	縄文土器片 弥生土器片 土師器 青磁	

トドキ遺跡Ⅲ

筑紫野市文化財調査報告書

第84集

平成17年3月28日

発行　筑紫野市教育委員会
〒818－8686　福岡県筑紫野市大字二日市西1－1－1
TEL　092－923－1111㈹
FAX　092－923－9644

印刷　大同印刷株式会社
〒849－0902　佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20
TEL　0952－71－8520㈹
FAX　0952－71－8528
URL http://www.daidou-jp.com